

# 福島原発事故後の親子の生活と健康 に関する調査報告書(2016年)

このたびは、私ども「福島子ども健康プロジェクト」が2013年1月から継続して行っております「福島原発事故後の親子の生活と健康に関する調査」(以下、「福島調査」)にご協力いただき、誠にありがとうございました。おかげ様で、第4回調査を実施し、報告書が完成しましたのでお送りいたします。

この報告書の目的は、第4回「福島調査」と「福島原発事故5年後の母子の生活と健康に関する調査」(以下、「全国調査」)の結果をもとに、福島と全国の状況を比較するとともに、福島県や原発に対する他県の考え方を明らかにすることにあります。

これまで調査終了後、毎年、調査報告書をお届けしておりましたが、その反響のなかで、「同じ年齢の他県の子どもの状態と比較してほしい」という意見が多数寄せられました。そこで、2016年3月に東北地方・北海道を除く全国の2008年出生児を持つ母親2000名を対象に「全国調査」を実施いたしました。

本報告書は、全体的な傾向を把握するために主要な項目を中心に調査結果を要約したものです。私ども「福島子ども健康プロジェクト」は、今後も福島県中通り9市町村の親子の生活と健康状態を定期的に記録し、親子が納得して自己決定できる環境を整えるのに必要な施策につなげていきたいと考えています。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

2016年 6月 吉日

## 【お問い合わせ先】

福島子ども健康プロジェクト

〒470-0393 愛知県豊田市貝津町床立101 中京大学 成元哲研究室

電話：0565-46-6516

e-mail：sungwonc@sass.chukyo-u.ac.jp

ホームページ：http://www.fukushima-child.org

\*本研究は科学研究費助成事業(15H01971、25460826、15H01850)の研究成果です。



## ★「福島調査」と「全国調査」について

本報告書は、第4回「福島調査」とその比較検討のために実施した福島県外に住む2008年度出生児をお持ちの母親に対する「全国調査」の結果を載せております。  
各調査の調査方法は以下のとおりです。

### ①第4回「福島原発事故後の親子の生活と健康に関する調査2016」(福島調査)

#### ▽調査方法

◆調査期間：2016年1月6日発送、1月12日から4月11日まで返送

◆実施方法：郵送調査

◆調査対象：福島市、桑折町、国見町、伊達市、郡山市、二本松市、大玉村、本宮市、三春町の福島県中通り9市町村の2008年度出生児(生年月日が2008年4月2日から2009年4月1日までのお子さん)とその母親(保護者)のうち、2015年実施した第3回「福島原発事故後の親子の生活と健康に関する調査2015」にご協力いただいた方(1207名)。また、第1回調査協力者で第3回調査未回答者のなかから再協力いただいた方(90名)。  
合計1297名。

回答結果：回答数1015票 (回答率78.3%)

### ②「福島原発事故5年後の母子の生活と健康に関する調査」(全国調査)

#### ▽調査方法

◆調査期間：2016年3月10日から4月5日

◆実施方法：インターネットを通じたネット調査 (株)クロスマーケティングに委託

◆調査対象：2008年度出生児を持つ母親2000名(東北地方・北海道を除く全国居住者)  
関東1000名、関東以西1000名

## ★ご覧頂くにあたっての注意点

- ①「福島調査」のアンケート票は、現在も調査対象者からご送付いただいております。私どもはできる限り早くご協力いただいた皆様に結果をお送りしたいと考え、4月11日までに到着した調査票を対象としました。そのため、この報告書の結果は1015票を集計したものです。
- ②各グラフの数値は、特にことわりがない限り、回答者全体(1015名、2000名)に対するパーセントです。ただし、小数点第2位以下は四捨五入しています。また、非常に小さい数値は表示していませんので、合計は必ずしも100%にはなりません。
- ③本調査データを引用される場合は事前に「福島子ども健康プロジェクト」までご連絡ください。

# 1 調査の回答状況

## 1.1 第3回調査の7割以上の方が回答

この調査は、福島市、桑折町、国見町、伊達市、郡山市、二本松市、大玉村、本宮市、三春町の福島県中通り9市町村の2008年度出生児6191名(生年月日が2008年4月2日から2009年4月1日までのお子さん)のなかから、2015年の第3回調査に回答していただいた方(1207名)に加えて、第1回調査協力者で第3回調査未回答者のなかから再協力いただいた方(90名)を対象に実施しました(合計1297名)。今回の第4回調査は、4月11日の時点で1015名(回答率78.3%)からご回答をいただきました。

表 1-1 地区ごとの回答状況

地区	第1回調査(2013年)			第2回調査(2014年)			第3回調査(2015年)			第4回調査(2016年)		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C
福島市	2137	883	41.3	883	525	59.5	525	379	72.1	410	327	79.8
桑折町	70	34	48.6	34	22	64.7	22	19	86.4	20	13	65.0
国見町	63	27	42.9	27	13	48.1	13	11	84.6	12	11	91.7
伊達市	404	175	43.3	175	118	67.4	118	88	74.6	94	74	78.7
郡山市	2644	1076	40.7	1076	629	58.5	629	476	75.7	514	389	75.7
二本松市	397	176	44.3	176	111	63.1	111	76	68.5	80	71	88.8
大玉村	81	44	54.3	44	27	61.4	27	21	77.8	22	20	90.9
本宮市	290	125	43.1	125	82	65.6	82	59	72.0	62	48	77.4
三春町	105	34	32.4	34	15	44.1	15	10	66.7	12	10	83.3
その他*		54		54	63		63	68		71	52	73.2
計	6191	2628	42.4	2628	1605	61.1	1605	1207	75.2	1297	1015	78.3

A : 調査対象者数 B : 回答数 C : 回答率(%)

\*「その他」は、調査対象地域の9市町村の住民基本台帳に2012年10月から12月までに記載されていた方で、それぞれの調査の時点で9市町村外に転居された方の人数です。

\*第2回調査(2014年)と第3回調査(2015年)において、その他の回答数が対象者数を上回っています。

これは、前回の調査票に記入された住所に送付いたしますが、転居等で9市町村外に移動があった場合、「その他」に分類されるためです。

\*第4回調査の対象者数が第3回調査の回答数を上回っています。これは、第4回調査は第3回調査回答者に加えて、第1回調査協力者で第3回調査未回答者のなかから再協力者を募った結果です。

## 2 子どもの生活

### 2.1 福島の子どもの「外遊び」時間の回復傾向が続くも、全国水準までは及んでいない

「外遊び」の時間については、時間の経過とともに増えていることがわかります。しかし、全国水準と比べるといまだ差は大きいといえます。1日あたり1時間以上外遊びをするのは福島では36%であるのに対し、全国では47%と10ポイントほどの違いがみられます。特に2時間以上は全国16%に対して福島は半分の8%でした。

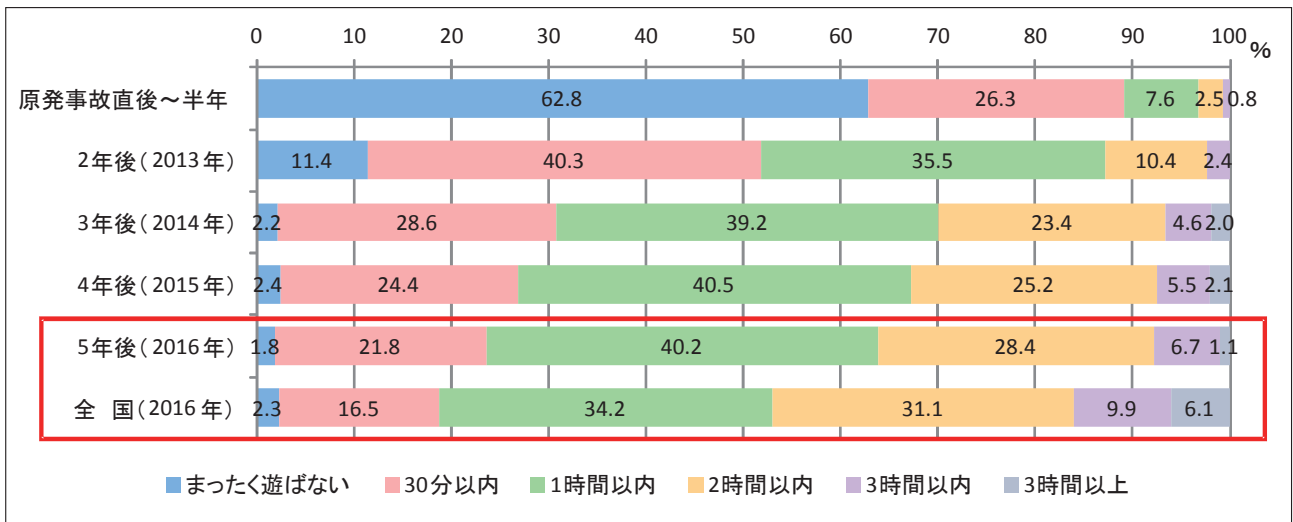


図2-1 外遊びの時間

### 2.2 福島の子どもの「テレビ・インターネット」の時間は全国値を上回っているが、2時間以上は昨年に比べ減少

「テレビ・インターネット」をみて過ごす時間は、「外遊び」の時間よりも大きく上回っており1時間以上が8割を占め、これは全国水準(67%)を上回っております。それでも、昨年と比べると2時間以上との回答が42%から33%へと減少しています。

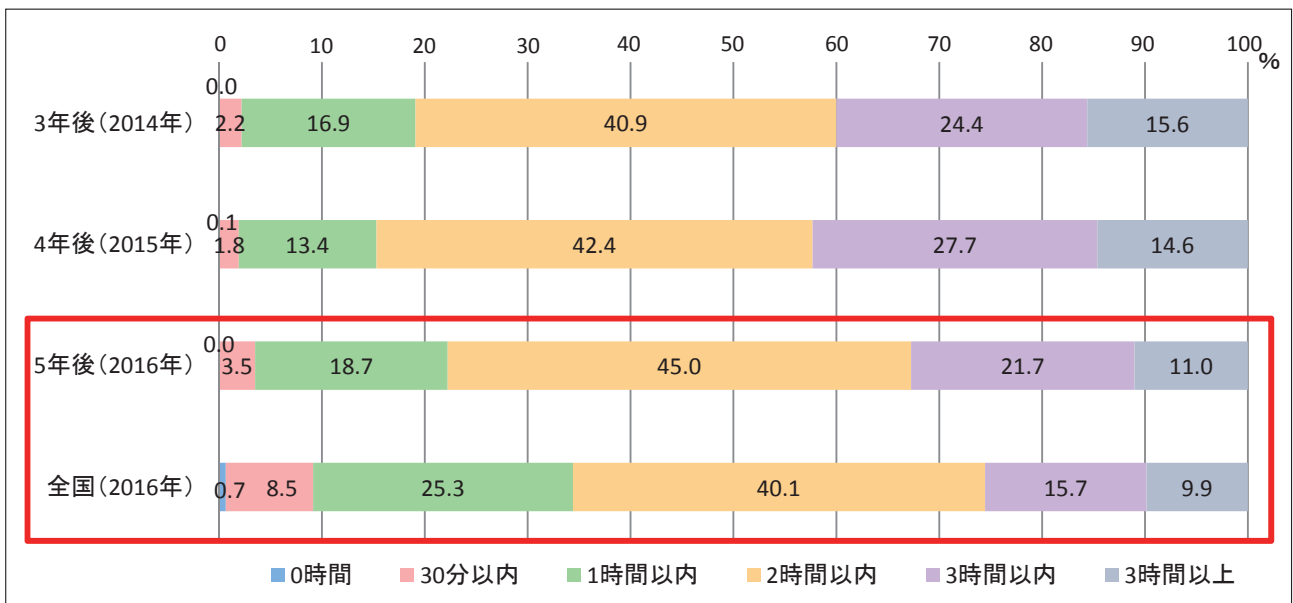


図2-2 テレビ・インターネットの時間

### 2.3 子どもと一緒に過ごすのは「食事」と「遊び」が中心であり、全国よりも長い時間過ごしている

福島と全国に共通することとして、「一緒に食事をする機会」「一緒に遊ぶ機会」の割合が多くなっています。その頻度は、全国よりも福島のほうが多いことがわかります。その他の特徴として、「お父さんが育児に参加する機会」が全国は「ほぼ毎日」が22.1%であるのに対し、福島では42.1%と2倍近く多くなっています。

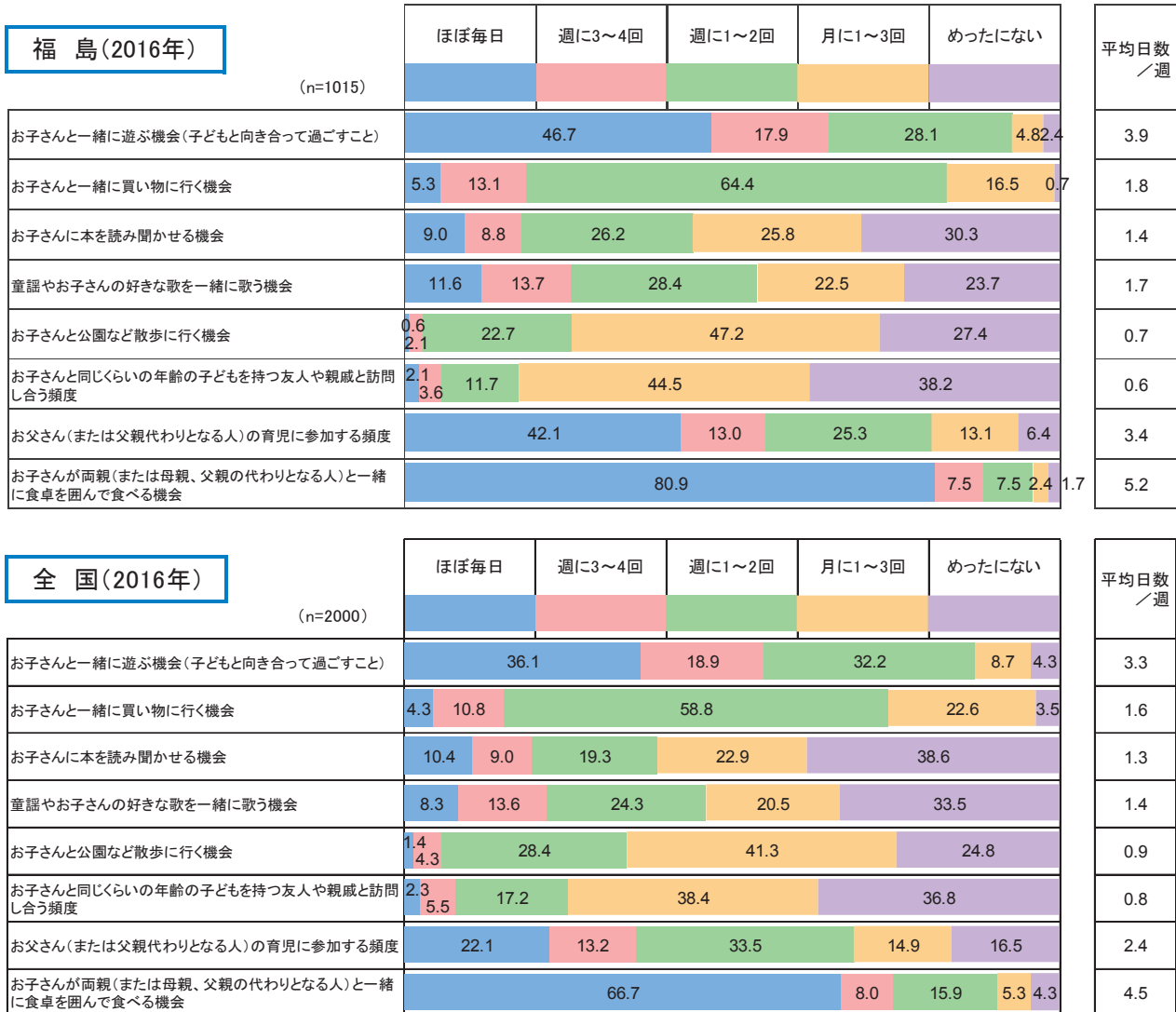


図2-3 子どもと一緒に過ごす機会

### 2.4 「水泳やスポーツクラブ」に半数近くの子どものが通い、約7割の子どもが何らかのおけいこや習い事をしているが、いずれも全国より少ない

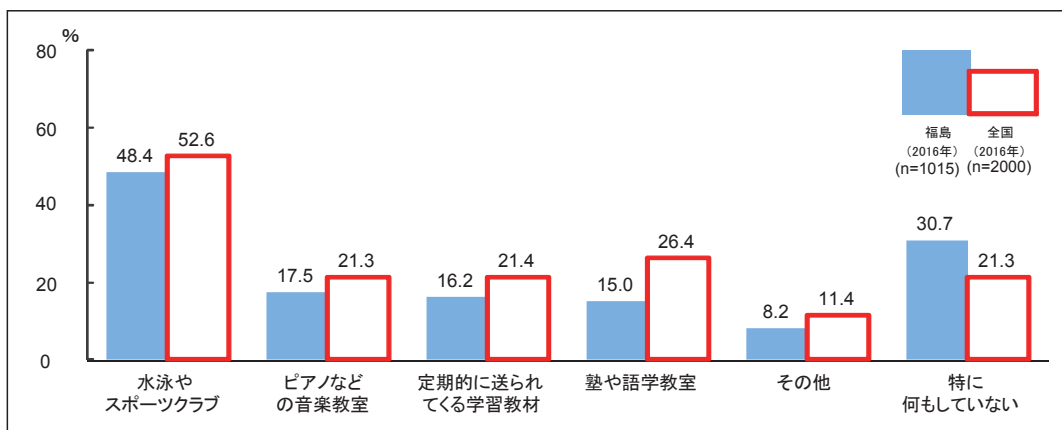


図2-4 子どものおけいこ・習い事



### 3.2 年少から年長にかけて平均点は減少したが、今回はやや上昇

平均点の推移をみると、今回、福島は点数は上昇(「向社会性」は低下)しています。点数が高いほど、支援の必要性が高いことを意味します。これは小学校入学による環境の変化が影響しているのかもしれませんが。ただ、福島はどの点も全国水準を下回って(「向社会性」は上回って)います。

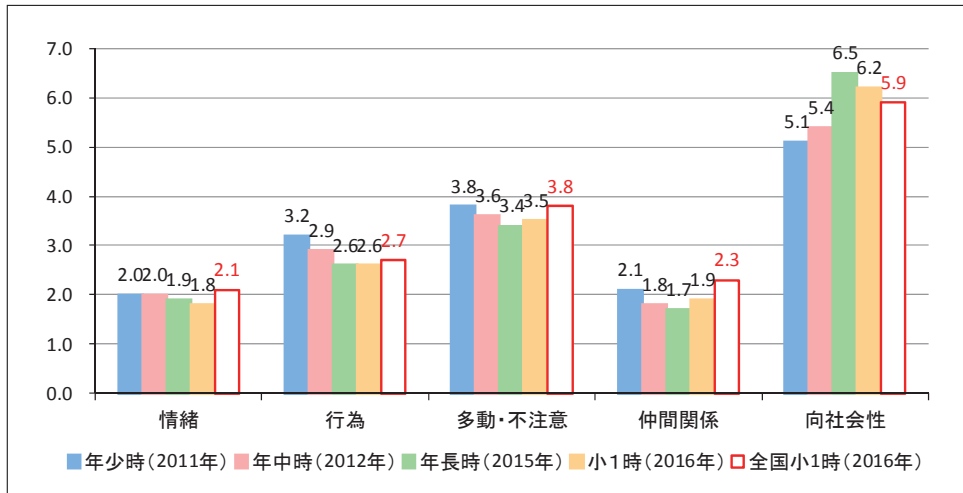


図3-2 SDQ日本語版の平均点数

### 3.3 女子は年長時の点数を維持しているが、男子は年長時(昨年)に比べ「向社会性」の低下目立つ

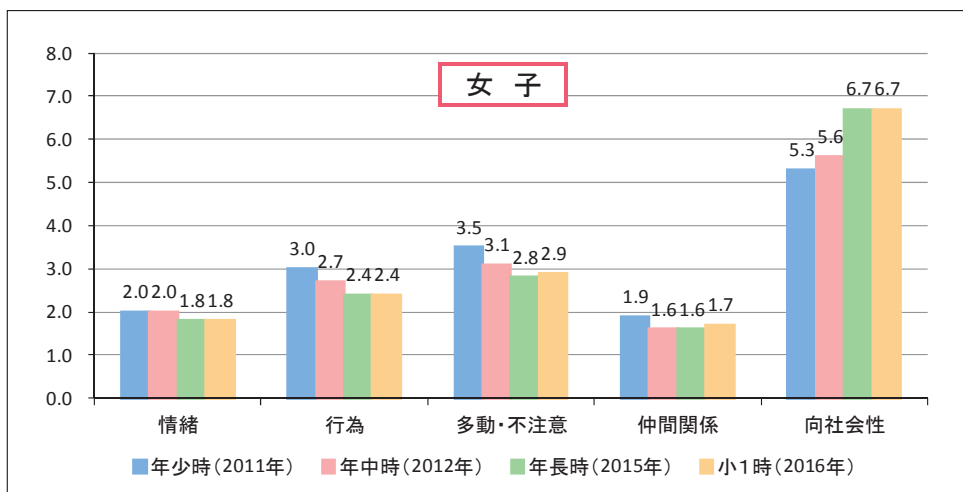
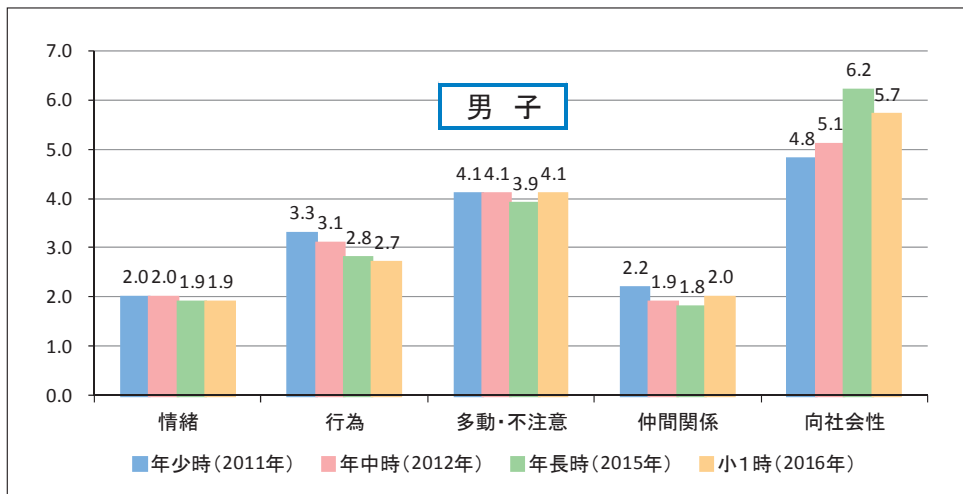


図3-3 性別ごとのSDQ日本語版の平均点数



### 3.4 健康状態の良好傾向は続いており、全国水準を上回る

健康状態が「良い」は70%まで増えました。身体的な健康も、徐々に改善されてきています。

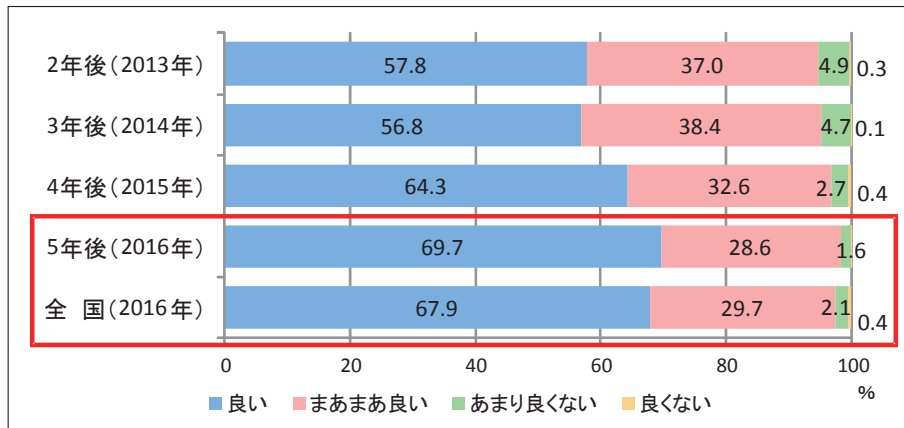


図3-4 子どもの健康状態

### 3.5 子どもの症状はほとんどの項目で減少

身体症状は、ほとんどの項目で減少していますが、「頭痛」と「疲れやすい」は増えています。全国調査と比べてとくに多いのは、「皮膚のかゆみ」「疲れやすい」でした。

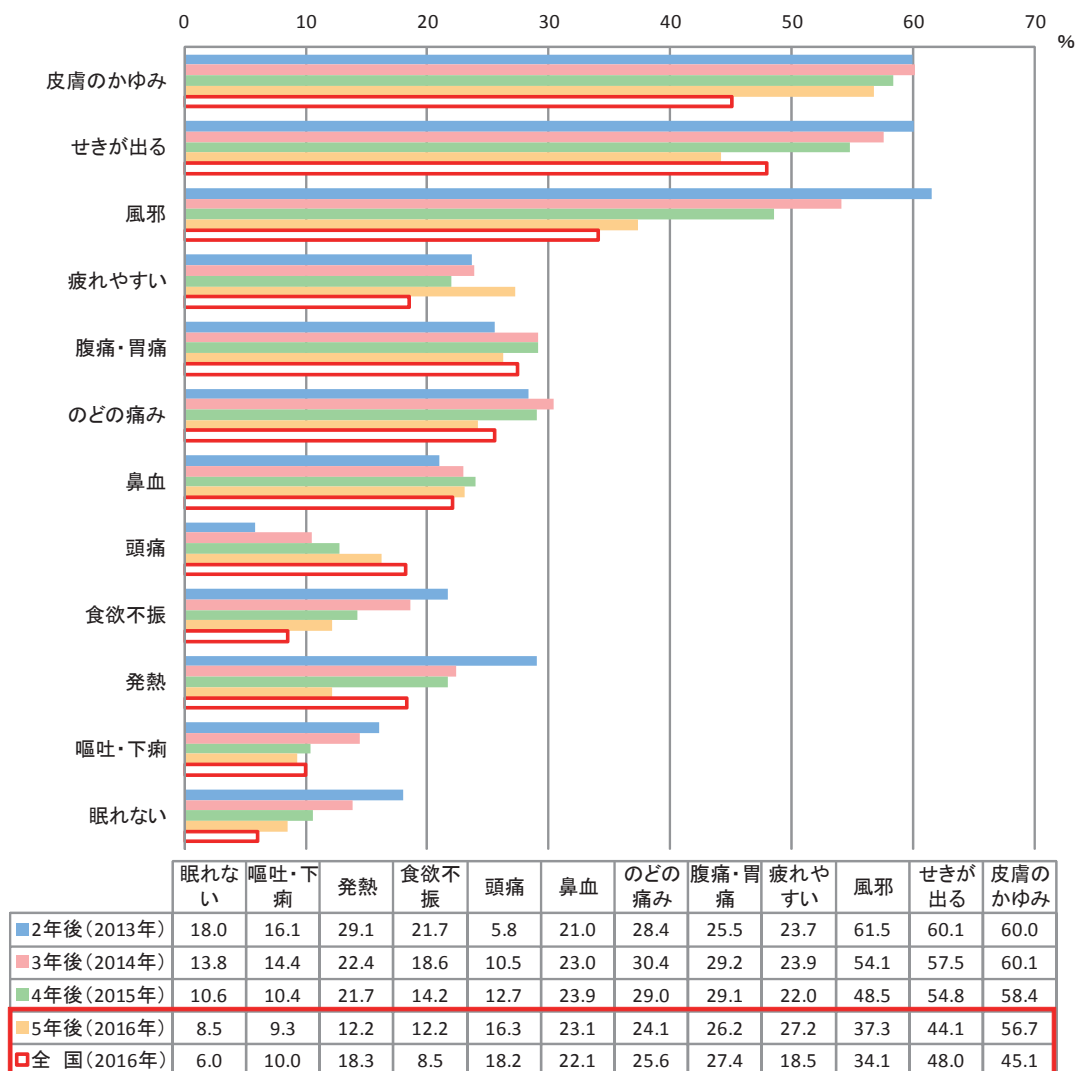


図3-5 直近半年間での子どもの症状 \*「よくある」+「ときどきある」の割合

## 4 母親の心身の健康

### 4.1 母親の健康状態もおおむね良好

母親の健康状態は  
昨年と変わらず、全国  
水準とほぼ同じでした。

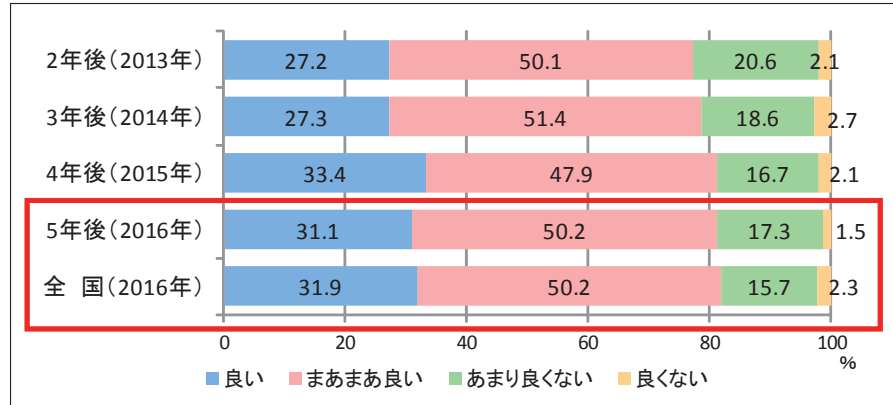


図4-1 母親の健康状態

### 4.2 母親の症状は昨年並みで、全国と比べると「皮膚のかゆみ」「肩こり」「腰痛」が多い

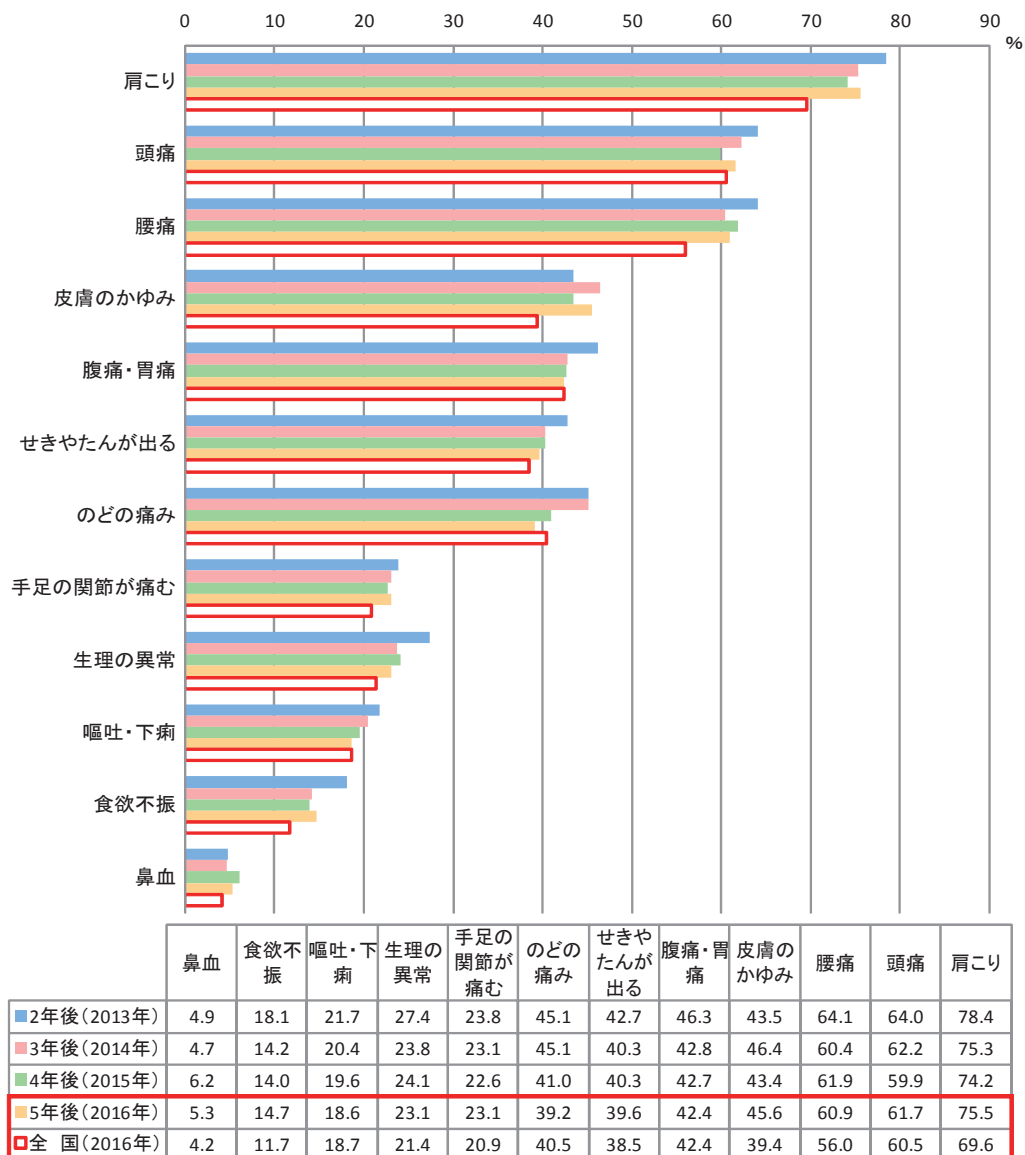


図4-2 直近半年間での母親の自覚症状 \*「よくある」+「ときどきある」の割合

### 4.3 母親の心の状態は安定、全国と比較しても精神的な問題は少ないほう

下記6項目は、心の健康状態を調べる際に広く利用される指標(K6)です。原発事故直後から半年後にかけて、母親の心の状態は不安定であったことがわかります。しかし、その後、心の健康状態が不安定な人の割合は少なくなっています。全国水準と比べて、現在、福島母親の心の状態は安定してきているといえそうです。

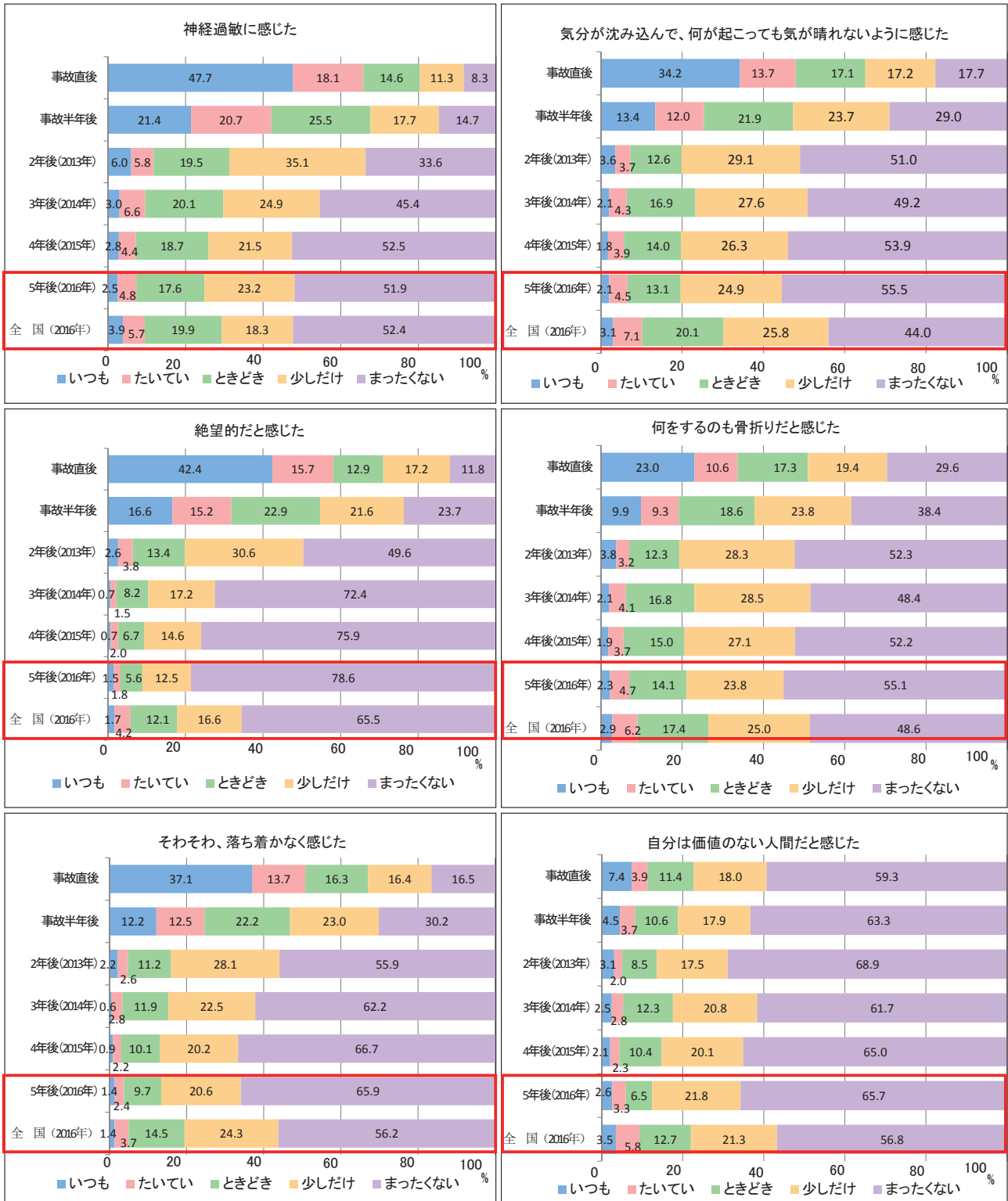


図4-3 母親の心の健康状態

#### 4.4 災害後の心の健康状態という点では、まだ影響が残る

下の項目は、「災害後」の健康状態を調べる指標(SQD)です。図4-3の一般的な心の健康状態を評価する指標(K6)だけを見ると、福島の母親の心の状態は安定してきているようにみえますが、60%以上の母親が「イライラ・怒りっぽい」「疲れやすく身体がだるい」と感じており、「寝つけない・途中で目が覚める」についても半数弱が感じています。この結果は、震災・原発事故の影響がまだ残っている可能性を示唆するものといえます。

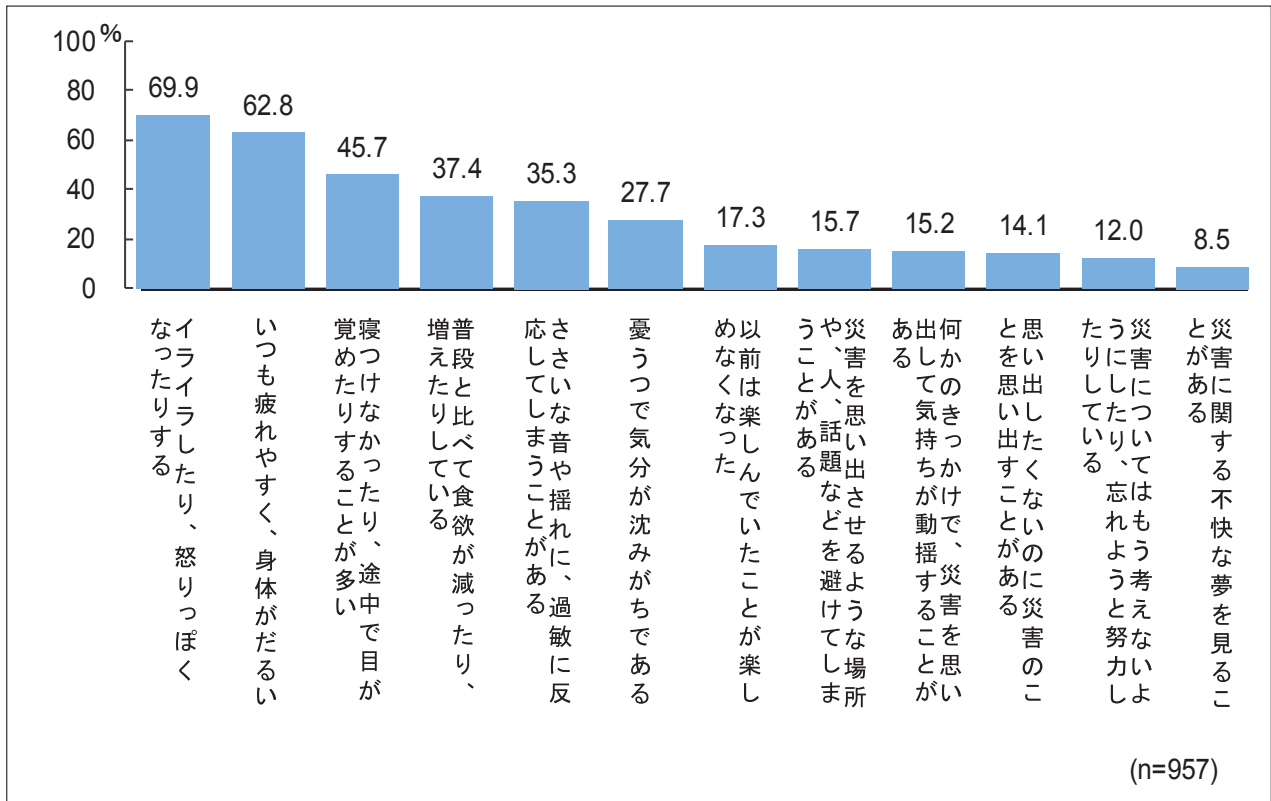


図4-4 災害後の母親の心の健康状態 \*「よくある」+「ときどきある」の割合

## 5 原発事故後の意識と生活

### 5.1 放射能汚染の深刻度は徐々に緩和されているが、依然4割の方が深刻であるとしている

「お住まいの地域の放射能汚染について、どの程度深刻だと考えているか」については、「深刻ではない」「あまり深刻ではない」が微増傾向です。一方、事故から5年が経過しても、ほぼ4割の方が「深刻」「ある程度深刻」と考えています。

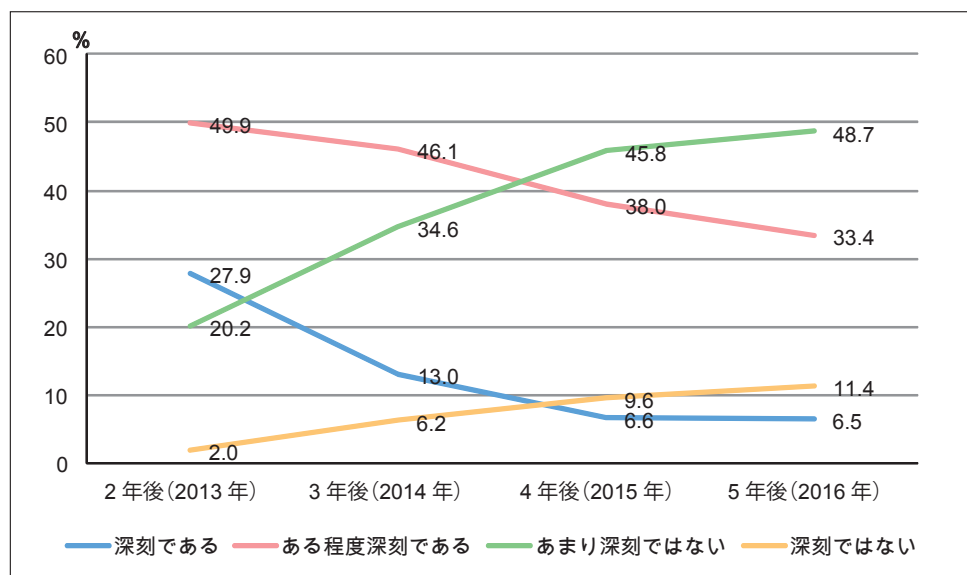


図5-1 放射能汚染の深刻度

### 5.2 保養に出かける頻度は、昨年と同水準

昨年から、保養に「たまに出かける」方と「出かけていない」方が、それぞれ4～5割となっており、ほぼ半々に分かれています。

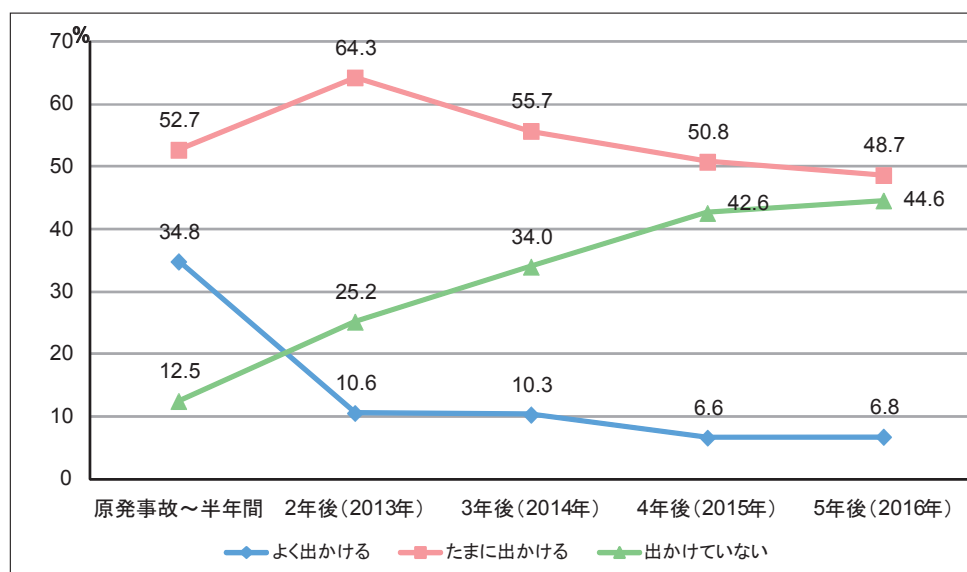


図5-2 保養の頻度

### 5.3 原発事故後の生活変化には4つの傾向がみられる

原発事故後の生活変化には4つの傾向が確認できます。

1つめは、事故後5年が経過してもなお、多くの方が当てはまると回答している項目（「補償をめぐる不公平感」「放射能の情報に関する不安」）です。

2つめは、ゆるやかな減少傾向にありながらも半数程度の方が当てはまると回答している項目（「経済的負担感」「健康影響への不安」「保養への意欲」「いじめや差別への不安」「子育てへの不安」）です。

3つめは、当てはまる方が急激に減少し、その後、横ばいとなっている項目（「地元産の食材を使用しない」「洗濯物の外干しをしない」「避難願望」）です。少なくなったとはいえ2～3割の方が当てはまると回答しています。

4つめは、事故直後から該当者が少ないながらも、一定の割合で推移している項目（「放射能への対処をめぐる配偶者、両親、周囲の人との認識のずれ」）です。

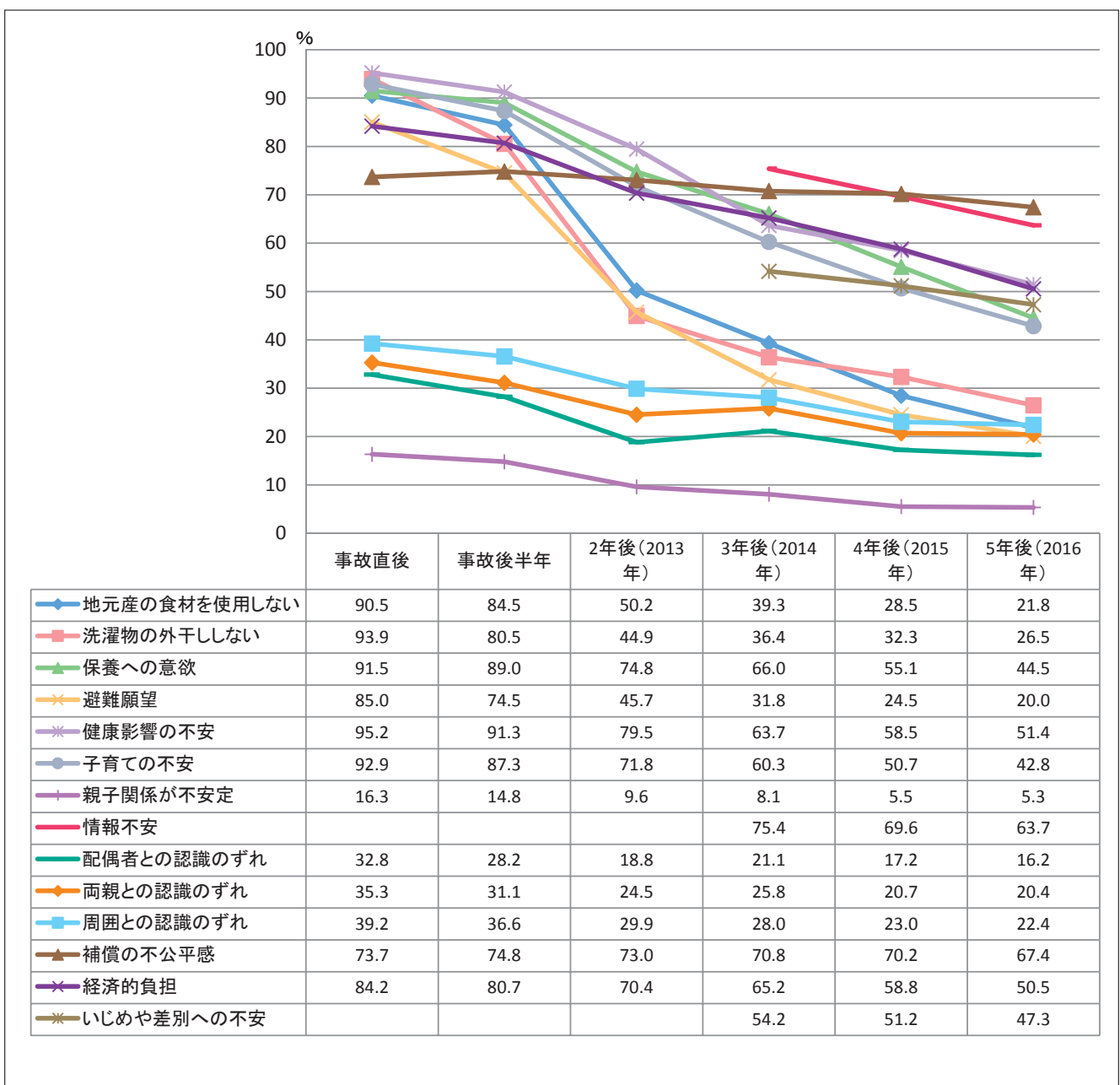


図5-3 原発事故後の生活変化 \*「当てはまる」+「どちらかといえば当てはまる」の割合

### 5.4 室内放射線量はほとんどが、毎時0.30 $\mu$ Sv未満

回答自体が少なく、一概にはいえませんが、5年後の時点で室内放射線量が毎時0.20マイクロシーベルト( $\mu$  Sv)を超えることがあったのは回答者のうち4%、自宅周囲の放射線量が0.30マイクロシーベルト( $\mu$  Sv)を超えることがあったのは、回答者の約3割でした。

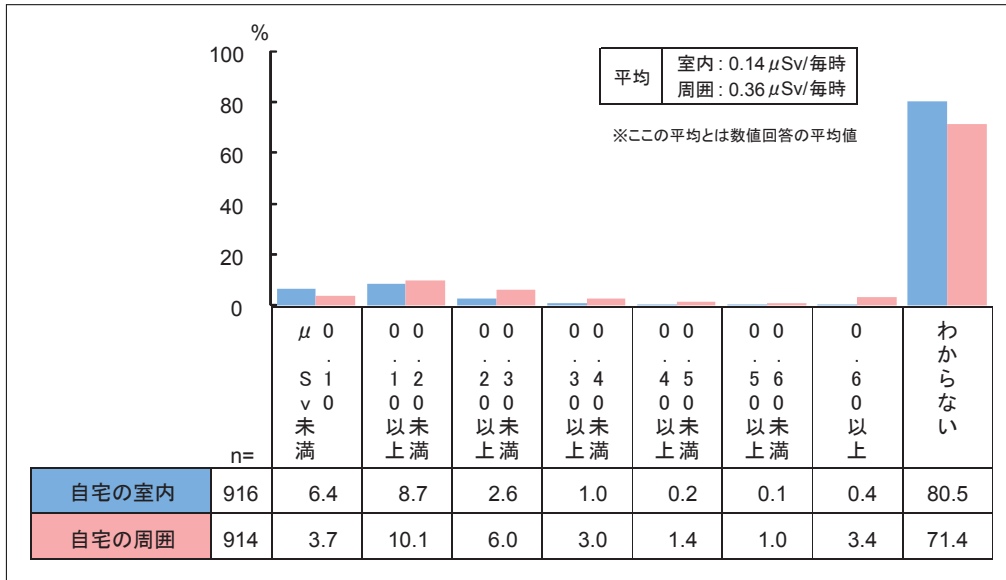


図5-4 直近半年間で最も高い線量

国際放射線防護委員会(ICRP)は、自然放射線や医療による被曝(ひばく)を除いた平常時の一般住民の被曝限度を年間1ミリSvとしている。国はこの数値を福島原発事故による個人の追加被ばく線量の長期目標としている。空間線量が毎時0.23マイクロシーベルトで、1日の8時間を屋外、16時間を木造家屋内で過ごした人の追加被曝が年間1ミリに相当すると推計している。(朝日新聞コトバンクより)

### 5.5 放射能に関する情報源は「テレビ」が中心で、次いで「役所・医療機関」「新聞」「インターネット」

放射能に関して参考になっている情報源を複数あげてもらったところ、テレビが71.1%でもっとも多く、次いで、役所・保健所・医療機関(54.3%)、新聞(46.9%)、インターネット(42.5%)でした。

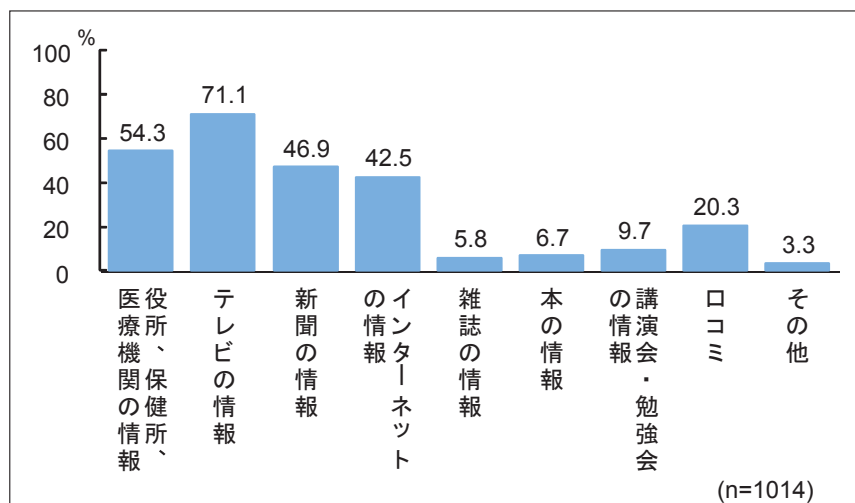


図5-5 放射線に関する情報源

### 5.6 8～9割の方が「子どもの将来の身体と心の健康」に影響があると懸念している

「現在」より「将来」に、「母親」より「子ども」に、放射能による健康影響があるだろうと懸念しています。母親は「身体」よりも「心」に、「お子さん」は「心」よりも「身体」への影響を心配しています。

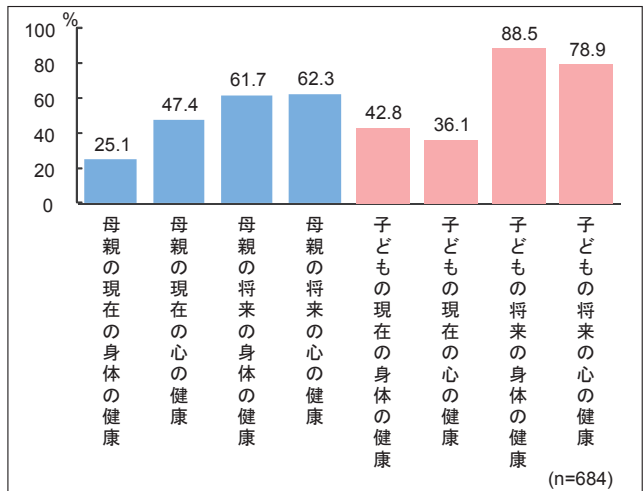


図5-6 健康に対する放射能の影響度

### 5.7 原発事故後、家族が離れて暮らした経験は3割弱

原発事故後、家族が離れて暮らした経験については、27.9%が「ある」との回答でした。「ある」と回答した方の期間を平均すると、約1年という結果になりました。

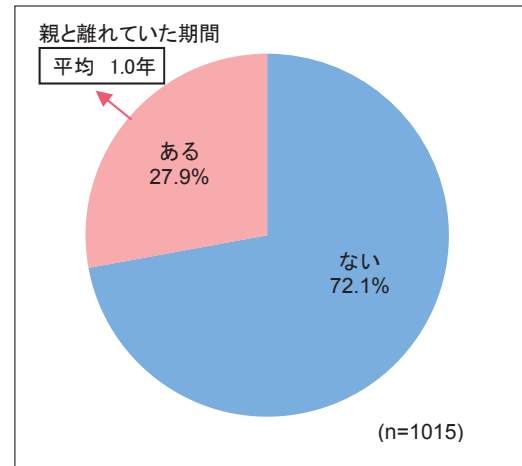


図5-7 家族が離れて暮らしていた経験

### 5.8 3人に1人の割合で、居住地域で原発事故や放射能について話題にしにくいと感じている

### 5.9 居住地域で8割を超える人が原発事故の風化を感じている

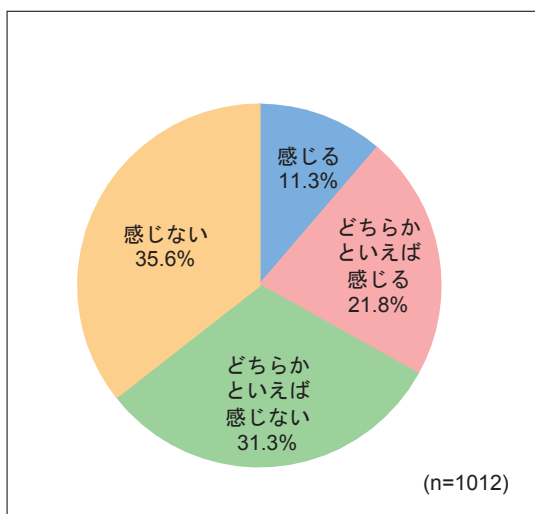


図5-8 原発事故や放射能について話題のしにくさ

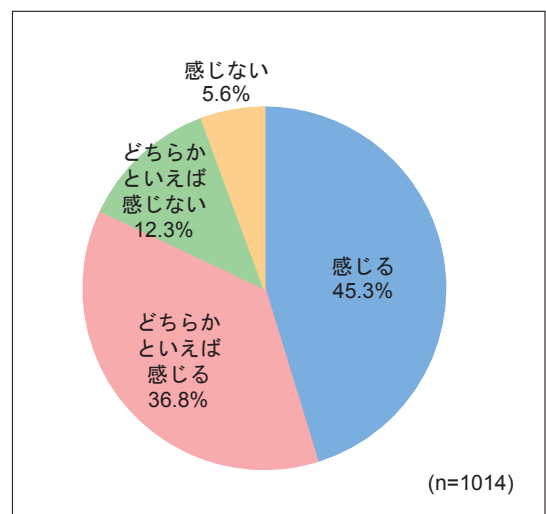


図5-9 原発事故の風化



5.10 子どもの甲状腺検査(福島県民健康調査)1回目では7割強が(A1)判定、2回目では(A2)判定が増加

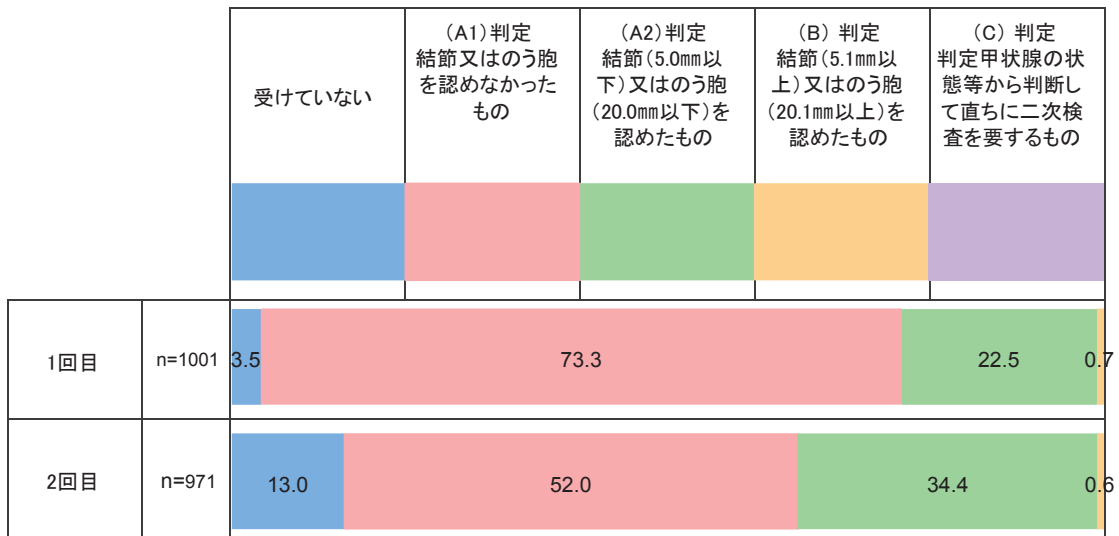


図5-10 甲状腺検査の結果

5.11 市町村、福島県への評価は徐々に改善

原発事故後の取り組みについては、「市町村」「福島県」は半数程度の方に評価されています。一方、「国」「東京電力」に対しては依然として1~2割程度の評価にとどまっています。全国調査でも同じく国・東電についてたずねましたが、福島の方がより厳しい評価でした。

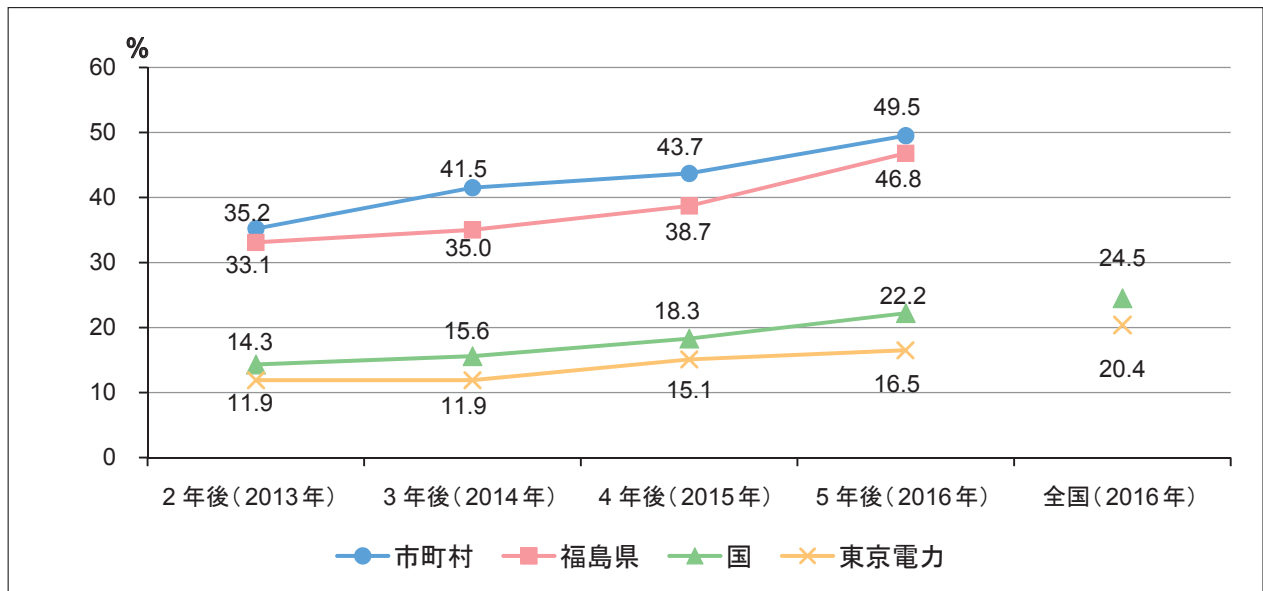


図5-11 行政と東京電力への評価

\* 事故後の取り組みを「評価する」+「ある程度評価する」の割合

## 6 地域とのかかわりと居住意識

### 6.1 育児関連サービスは半数程度が利用

利用している育児関連サービスは「放課後児童クラブ」が26%、「児童館・児童センター」13%であり、何らかのサービスを利用している人は45%でした。全国に比べ、福島県の「児童館・児童センター」の利用が少なくなっています。

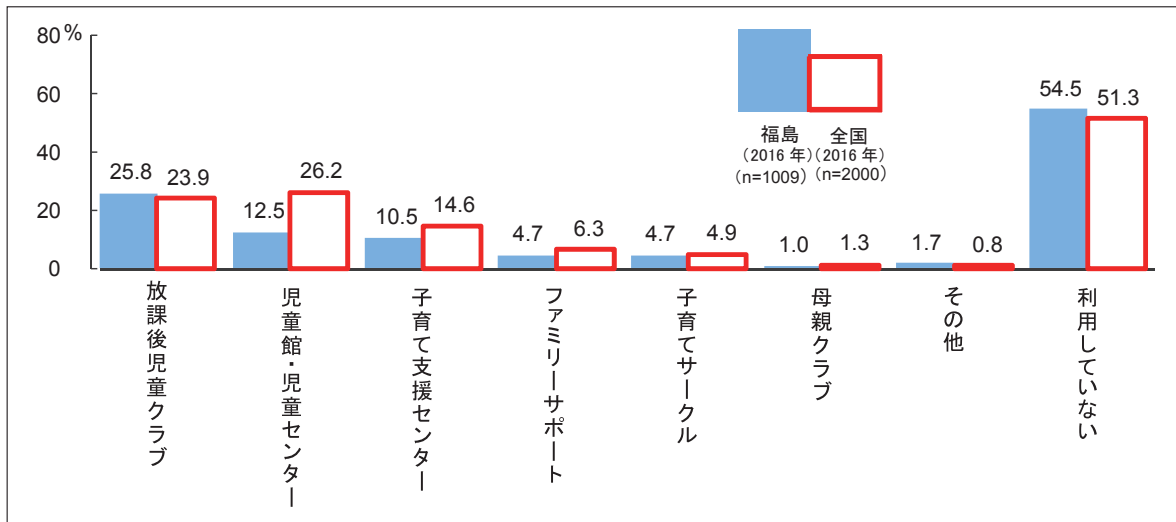


図6-1 利用している育児関連サービス

### 6.2 地域とのかかわりは全国水準よりも多い

約7割の方が、「親子会・PTA」「地区会・町内会・自治会」に加入しており、全国に比べて多いことがわかります。また、福島では約9割の方が何らかの団体・組織に参加しています。

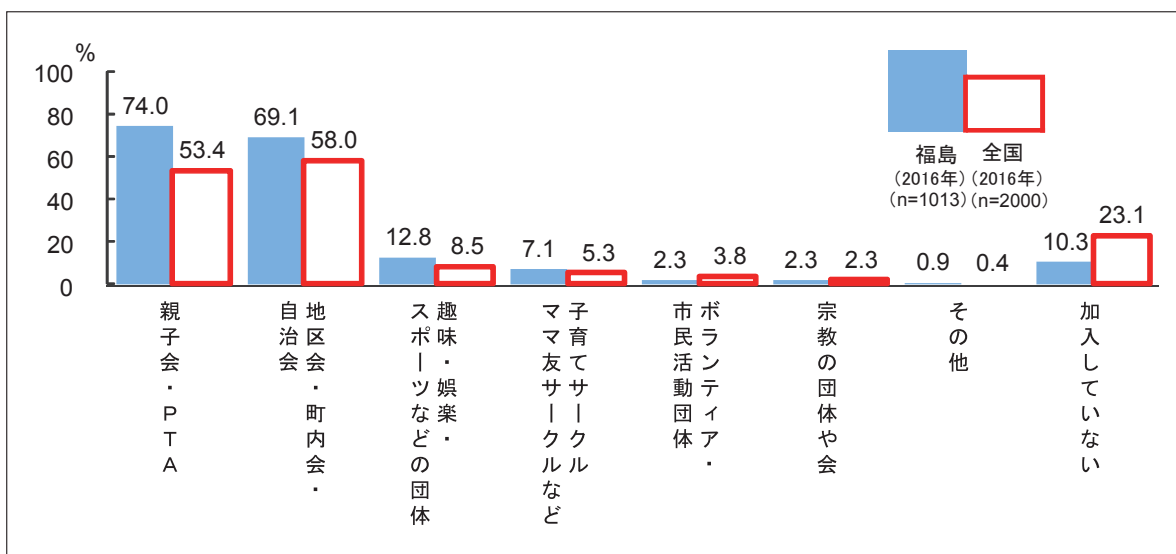


図6-2 加入している団体・組織

### 6.3 地元への愛着、誇り、人間関係の良さなど肯定的な回答が多い

原発事故後、低下した地域愛着度は回復しつつありますが、事故前の水準には戻っていません。

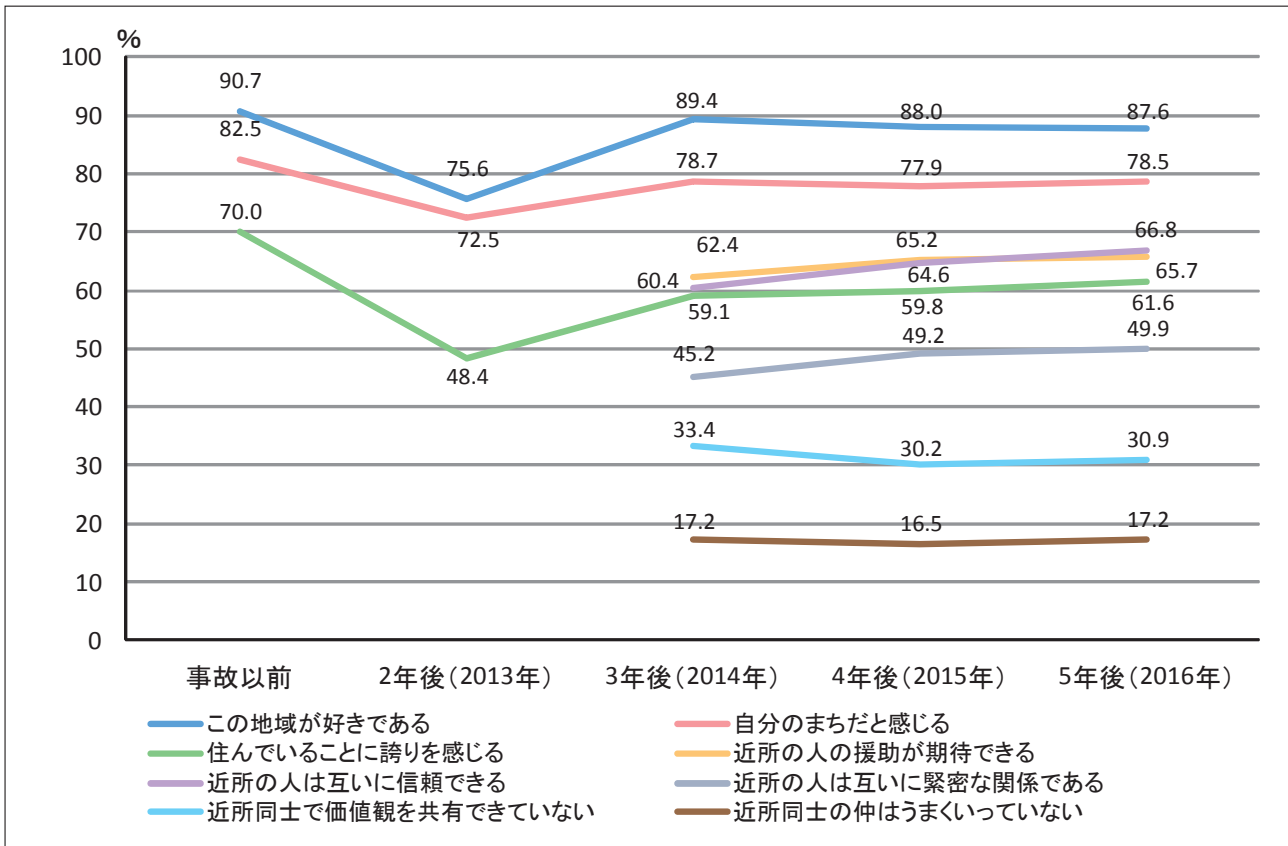


図6-3 地域の環境や人間関係への意識

\*「あてはまる」+「どちらかといえばあてはまる」の割合

### 6.4-6.7 福島は転居が多く、居住継続意思は二極化の傾向

福島の持ち家率は全国よりやや高くなっています。居住年数は、全国よりも長い一方、現在の住居に住み始めて1年未満の人も6.3%と、全国の2倍以上です。転居の経験も全国よりも多くなっています。こうした結果は、原発事故が影響しているかもしれません。

なお、現在の地域での居留意志では、全国と比べて「ずっと住み続けたい」の割合が55.7%と多い一方、「できれば引っ越したい」も10.6%と多く、二極化がみられます。

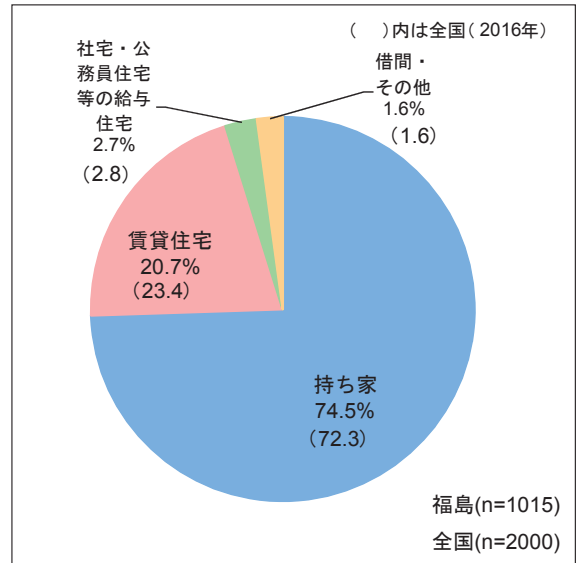


図6-4 住居タイプ

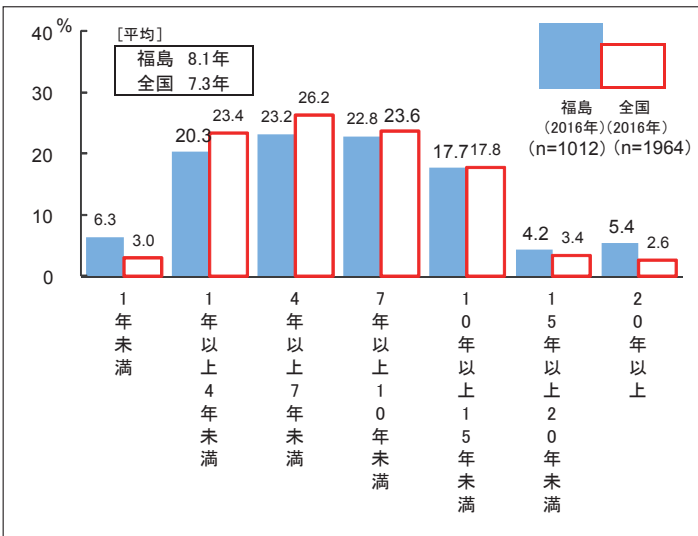


図6-5 居住年数

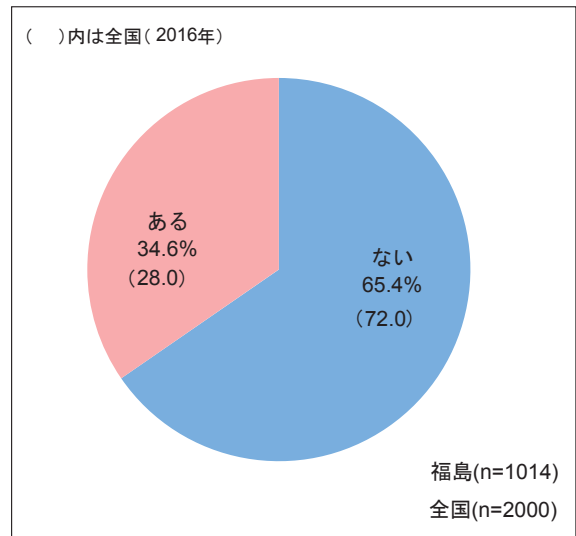


図6-6 福島原発事故後の転居の有無

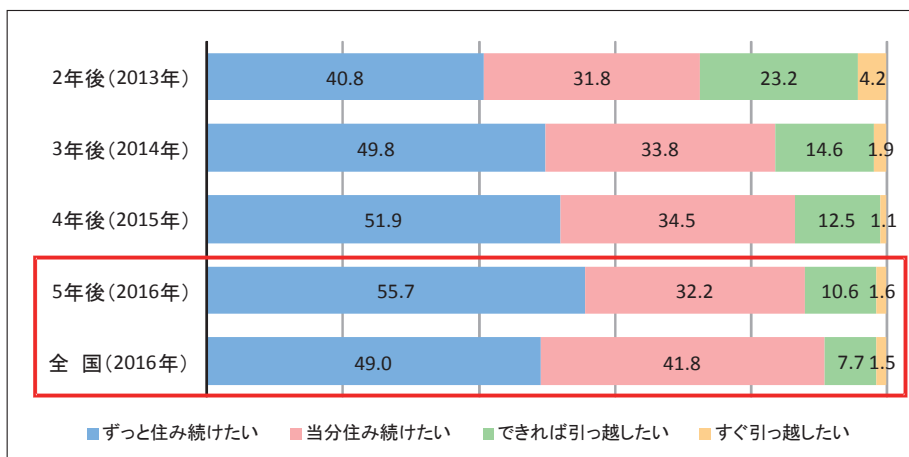


図6-7 現在の地域での居留意志

## 7 生活において何かと助けになってくれる人

### 7.1 何かと助けになってくれる人の数は

#### 全国よりも多い

日々の生活で助けになってくれる人の数は、4～5人がもっとも多く35.6%、それ以上の人数を回答した方も全国水準より多くなっています。

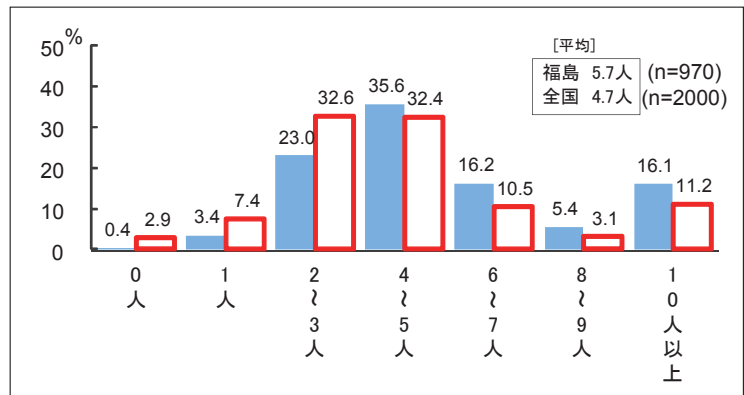


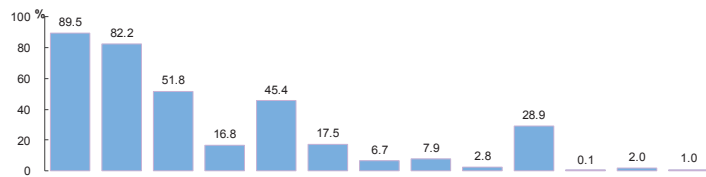
図7-1 何かと助けになってくれる人の数

### 7.2 夫が9割、自分の親が8割強と多く、

#### 全国よりも多め

「何かと助けになってくれる人」を5人まで挙げた場合、1番目には「夫」を挙げる人が多く、2番目3番目は「自分の親」が多くなっています。

福島(2016年)

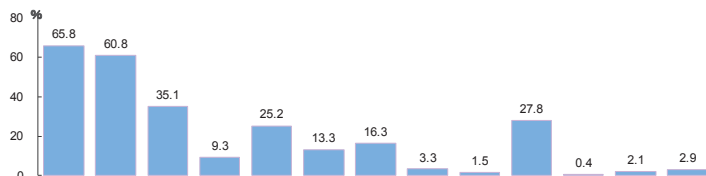


\* 全体のみ複数回答

n=30以上で  
 項目内で1位  
 項目内で2位  
 項目内で3位

	夫	自分の親	夫の親	子ども	きょうだい	その他の家族・親戚	近所の人	職場や仕事関係の人	入居している組織や団体に加わっている人	同じ組織や団体に加わっている人	友人・子どもを通じた友人	インターネットで知り合った人	その他	誰もいない(0人)
全体 (n=1011)	89.5	82.2	51.8	16.8	45.4	17.5	6.7	7.9	2.8	28.9	0.1	2.0	1.0	
1番目に挙げた人 (n=1001)	78.1	15.3	2.3	0.3	1.7	0.4	0.2	0.0	0.0	1.4	0.0	0.3		
2番目に挙げた人 (n=980)	6.1	52.6	18.4	6.8	8.7	2.0	0.9	0.6	0.4	3.3	0.0	0.2		
3番目に挙げた人 (n=921)	3.9	31.2	25.5	6.8	15.6	5.5	1.4	1.2	0.4	7.8	0.0	0.5		
4番目に挙げた人 (n=783)	1.5	16.2	19.3	7.3	23.8	8.0	3.1	2.6	0.9	16.3	0.1	0.9		
5番目に挙げた人 (n=647)	2.5	10.2	17.9	5.6	17.3	10.8	4.3	7.6	2.5	20.1	0.0	1.2		

全国(2016年)



\* 全体のみ複数回答

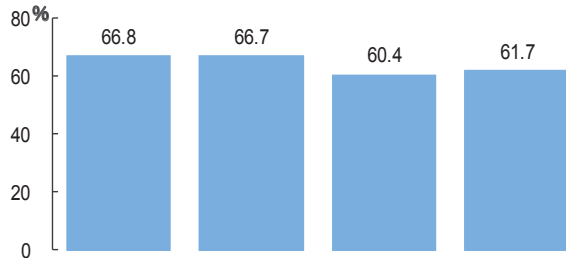
n=30以上で  
 項目内で1位  
 項目内で2位  
 項目内で3位

	夫	自分の親	夫の親	子ども	きょうだい	その他の家族・親戚	近所の人	職場や仕事関係の人	入居している組織や団体に加わっている人	同じ組織や団体に加わっている人	友人・子どもを通じた友人	インターネットで知り合った人	その他	誰もいない(0人)
全体 (n=2000)	65.8	60.8	35.1	9.3	25.2	13.3	16.3	3.3	1.5	27.8	0.4	2.1	2.9	
1番目に挙げた人 (n=1942)	53.3	26.4	6.0	1.3	2.2	1.1	3.2	0.5	0.3	5.2	0.1	0.4		
2番目に挙げた人 (n=1779)	6.4	42.2	17.0	6.4	5.8	3.0	5.6	0.6	0.4	11.6	0.1	0.9		
3番目に挙げた人 (n=1508)	6.2	24.2	19.2	5.8	13.3	5.2	8.2	1.3	0.7	15.3	0.1	0.7		
4番目に挙げた人 (n=1153)	3.7	13.2	18.7	3.6	13.8	8.7	12.0	1.8	1.0	22.1	0.2	1.1		
5番目に挙げた人 (n=944)	4.1	9.5	14.8	2.9	13.1	10.0	12.3	2.3	1.0	28.1	0.3	1.6		

図7-2 何かと助けになってくれる人の間柄

### 7.3 サポート内容としては、夫は「重要なこと・悩み相談」をはじめとして様々なことをサポートしており、全国よりも多め

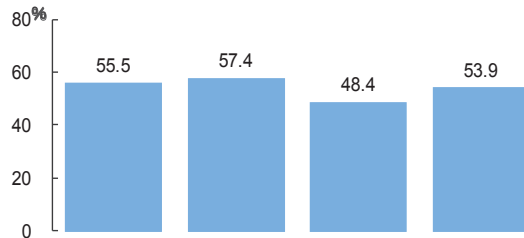
福島(2016年)



		n=	りみ話重 すをし要 る相たな 談りこ し、と た悩を	伝き人 いに手 を気が 頼軽い めにる 手と	の育っ 児ての く相 れ談 るに	ても外 くの出 れ世中 る話を 子しど
全体		999	66.8	66.7	60.4	61.7
何かと助けに なってくれる人 の間柄	夫または妻	780	93.8	75.3	71.9	80.5
	自分の親	152	70.3	73.8	59.8	72.6
	夫または妻の親	23	43.6	67.7	44.0	74.4
	きょうだい	17	70.7	60.7	64.2	48.7
	友人・子どもを通じて知り合った友人	14	70.7	41.0	84.8	24.2

※n=30未満は参考値のため灰色。

全国(2016年)



		n=	りみ話重 すをし要 る相たな 談りこ し、と た悩を	伝き人 いに手 を気が 頼軽い めにる 手と	の育っ 児ての く相 れ談 るに	ても外 くの出 れ世中 る話を 子しど
全 体		7173	55.5	57.4	48.4	53.9
何かと助けに なってくれる人 の間柄	夫	1318	81.9	64.0	55.0	73.6
	自分の親	1836	59.3	62.6	46.6	63.3
	夫または妻の親	1013	31.1	56.3	30.8	67.0
	子ども	286	22.4	83.2	2.8	31.8
	きょうだい	617	58.2	57.2	44.2	43.6
	その他の家族・親戚	326	38.3	58.6	33.4	42.3
	近所の人	529	33.5	45.2	61.2	31.2
	職場や仕事関係の人	83	67.5	37.3	54.2	21.7
	同じ組織や団体に加入している人	43	72.1	44.2	55.8	20.9
	友人・子どもを通じて知り合った友人	1053	60.2	43.9	71.8	33.0
	インターネットで知り合った人	10	90.0	20.0	80.0	20.0
	その他	59	79.7	35.6	50.8	25.4

※n=30未満は参考値のため灰色。

図7-3 サポートの内容(間柄別)

## 8 他地域からみた「福島」

このページは全国調査の結果について掲載しています。

### 8.1 福島県に親族・友人がいるのは約2割

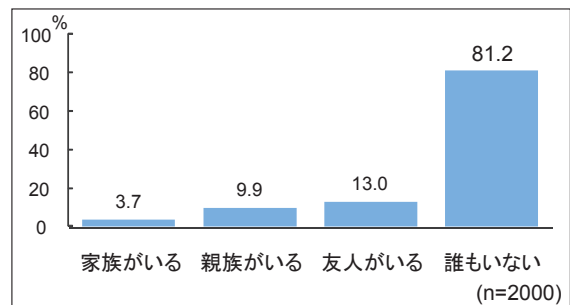


図8-1 福島県在住の親族・友人の有無

\*家族、親族、友人の数は複数回答

### 8.2 放射能の影響に不安を抱える母親が多く、避難区域外への補償に肯定的

下図は、福島県以外に住む同じ年齢のお子さんをもつ母親の意見です。57%の方が、放射能による健康影響への不安を感じ、82%の方が、放射能の情報に関する不安を感じています。これらの結果は、今年の福島調査よりも、前者が6%、後者が19%、高い数字です。

また、福島産の食材を使うことに50%の方が、子どもを福島に連れて行くことに59%の方が、それぞれ、ためらいを感じています。

一方、「自主避難をした人」、「避難区域外の人」のどちらに対しても、補償すべきだとの意見が4人中3人の割合を占めています。

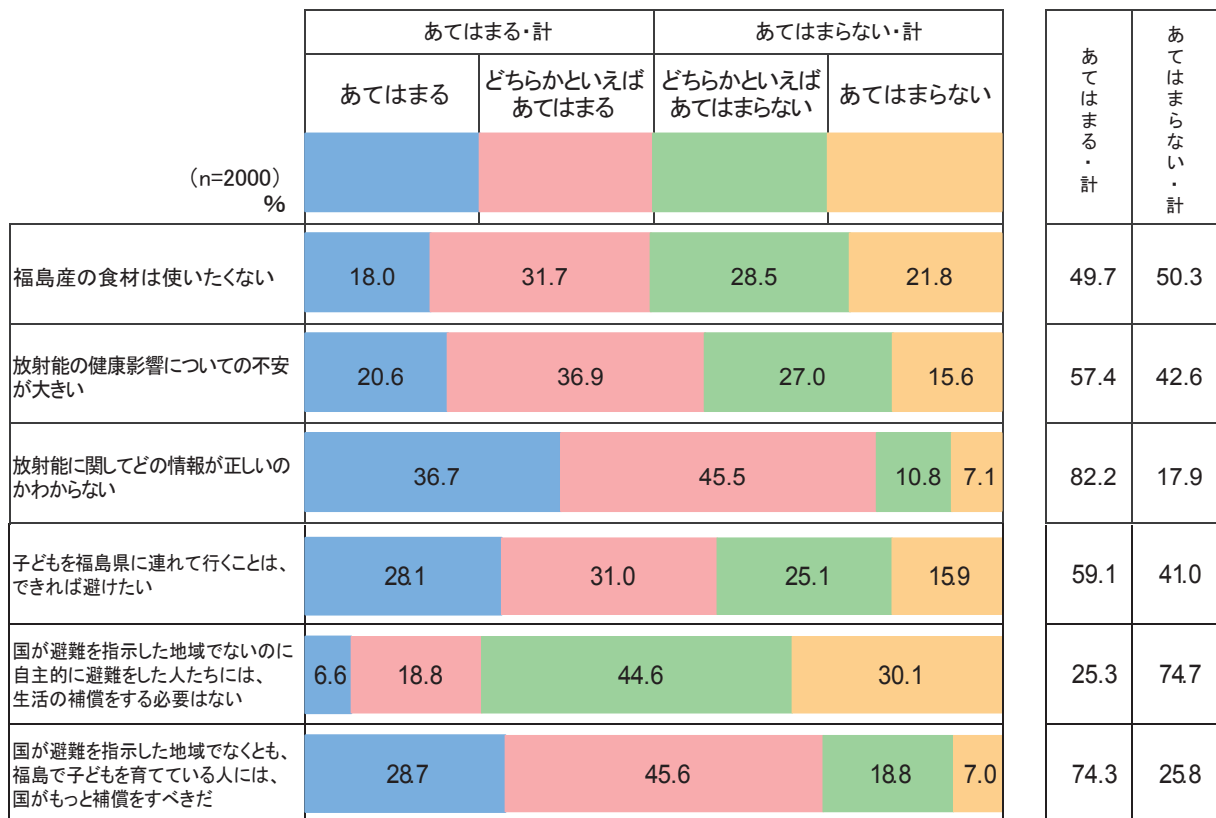


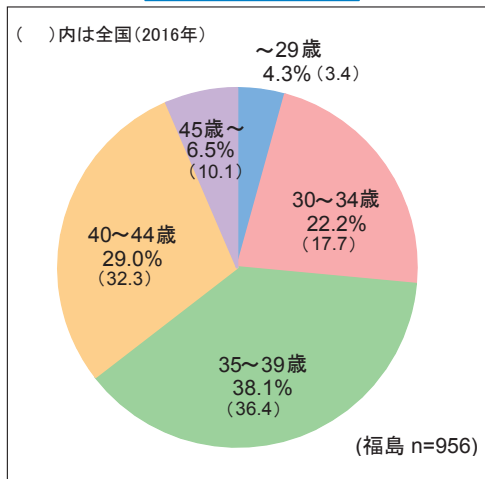
図8-2 福島県外の原発事故後の意識と生活

## 9 調査対象者の特性

対象者の続柄

		母	父	祖母	祖父	その他
n=						
福島(2016年)	1015	94.3	5.3	0.3	0.1	0.0
全国(2016年)	2000	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0

母親の年齢構成



母親の婚姻状況

		既婚 (有配偶者)	既婚 (離・死別)	未婚
n=				
福島(2016年)	956	94.6	4.7	0.7
全国(2016年)	2000	88.6	11.2	0.2

職業

			管理職	専門・技術職	事務職	販売・営業職	サービス職	生産工程・労務職	保安職	農林漁業	その他	無職
n=												
福島(2016年)	母親	1003	1.6	23.1	20.9	5.4	8.7	5.0	0.0	1.3	*	34.0
	父親	963	13.5	18.1	11.5	13.2	4.3	32.8	3.9	2.2	*	0.5
全国(2016年)	母親	2000	1.3	9.5	14.4	4.5	5.8	2.1	0.2	0.3	10.3	51.8
	父親	1772	16.7	18.7	12.7	13.7	5.0	13.6	1.6	0.6	15.5	2.0

雇用形態

			フルタイム雇用者	パート・アルバイト・派遣社員	自営業主、または家族従業員	専業主婦(主夫)	会社の経営者・役員	失業中	その他
n=									
福島(2016年)	母親	1003	29.7	31.4	5.1	31.8	0.7	1.3	*
	父親	960	84.8	2.6	7.0	0.2	5.2	0.2	*
全国(2016年)	母親	2000	12.5	29.7	2.3	53.5	0.4	0.4	1.4
	父親	1772	86.1	2.5	6.9	0.5	2.9	0.7	0.3



## 10 自由回答欄の声

自由回答欄には多くご意見をいただきました。自由記述があるのは、第1回調査では1204人(回答総数の45.8%)、第2回調査では714人(同44.1%)、第3回調査では745人(同61.7%)で、今回の第4回調査では610人(同60%)です。これらを10項目に分けて紹介します。数字は、私ども「福島子ども健康プロジェクト」事務局の3名が読んで数えた意見数を示します。ただし、重複を含んでいます。今回、最も多い意見は、(1)関心の低下(風化)、(2)子どもの将来の健康、(3)除染に不満、除染の効果に疑問、(4)補償をめぐる不公平感、(5)国・行政の対応への不満でした。

1. 生活拠点(避難、保養、除染)						
避難	避難している	2013年	2014年	2015年	2016年	
		49	16	26	26	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今の生活が満足するものなので、福島には戻りたくない</li> <li>・事故後すぐに県外に出なかったことを後悔している</li> <li>・夫や義父母の理解があり、母子避難ができる</li> <li>・福島に対する古里のような思いもあり複雑</li> <li>・家族、友人が離れていく気がする</li> <li>・高齢の父母を残していることに負い目を感じる</li> <li>・移住(子ども)か帰還(親)か悩んでいる</li> <li>・周りの人に福島にいたと話しづらい</li> <li>・子ども達の転校がだんだん難しくなっている</li> </ul>
	避難したが戻ってきた	35	9	7	9	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもが転校して、周囲となじめず、苦い経験をした</li> <li>・家族と我が家で地元で生活するのは精神的に大きな安定がある</li> <li>・離れてしまったことに負い目を感じる</li> </ul>
	避難したいができない	68	37	23	25	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仕事がある</li> <li>・認識のずれ</li> <li>・家(ローン)</li> <li>・新居に引越したばかりだから</li> <li>・支援があれば早く出たい</li> <li>・金銭的に難しい</li> <li>・学校から転校しないようにいわれている</li> </ul>
	避難しない	3	4	22	23	<ul style="list-style-type: none"> <li>・福島が好きだから住み続けたい</li> <li>・今の情報を総合的に判断して決断した</li> <li>・人間関係が良好だから</li> <li>・持ち家だから</li> <li>・生活面で不安があったから</li> <li>・親が福島にいるから</li> <li>・子どもにいい環境だから</li> </ul>
	避難合計	155	66	78	83	
保養	保養プログラムの拡充を望む	33	33	6	16	対象:小学生など大きい子も参加できるもの 内容:体を動かす機会が増えるようなもの 時間:放課後や土日、夏休みなどの長期休暇中 条件:送迎しなくてもよいもの、子どもだけで参加できるもの 悩み:募集が減り探すのが大変、送迎が大変 保養企画が資金難で少なくなっている
	保養に関する情報を得たい	3	6	4	3	・抽選や調べられる人しか参加できないものが多い
	保養に満足	1	1	9	8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保養に行くと温かい人に出会えた</li> <li>・自費で行くと費用がかかるので助かる</li> </ul>
	保養合計	37	40	19	27	

除染	除染にある程度満足している	2013年	2014年	2015年	2016年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・早く除染が終わったので住みやすくなった</li> <li>・家や庭の除染が終了し安心</li> <li>・外遊びをさせることができるようになった</li> </ul>
		2	9	28	18	
	除染に不満がある 除染の効果に疑問がある	15	25	93	73	<ul style="list-style-type: none"> <li>・除染の汚染物の処理の仕方がずさん(庭に埋めてある)</li> <li>・地域によって除染作業の進み具合が違う</li> <li>・除染作業時にトラブルが多くて精神的に疲れた</li> <li>・小さい子どもがいるのに除染が遅かった</li> <li>・育ててきた草花も取り除かれて庭仕事をする気になれず気分が落ち込んだ</li> <li>・除染していない所が分かりにくく不安</li> <li>・見張っていないと手抜き作業をする</li> <li>・除染作業が希望とおりに行なわれないので税金のムダ遣いだと感じる</li> <li>・除染作業車両が増えて道路がボコボコになった</li> </ul>
	除染を望む	24	74	32	14	<ul style="list-style-type: none"> <li>・福島の大範囲の除染をもっと進めてもらいたい</li> <li>・近くの池や山、林なども除染して欲しい</li> <li>・効果があるなら何回でも行なってほしい</li> <li>・居住地域の除染がされていない</li> </ul>
	除染合計	41	108	153	105	

## 2. 食生活・洗濯

食	地元産の食材や水道水はできるだけ使わない	44	32	20	26	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの将来のために使わない</li> <li>・分けてごはんを作ることもある</li> <li>・水道水は使わず、ミネラルウォーターを購入</li> </ul>
	地元産の食材や水道水を使わざるを得ない、使っている	10	2	21	21	<ul style="list-style-type: none"> <li>・気にしなくなった</li> <li>・経済的に使わざるを得ない(県外産は高値のため)</li> <li>・検査済みなので安心</li> <li>・周囲の線量低下で家庭菜園の野菜も使用している</li> </ul>
	学校(保育園)給食に対する不満	12	11	3	8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ほとんど県内産の食材を使用しているので不安</li> </ul>
	食合計	66	45	44	55	
洗濯	外干しをしていない	6	4	1	3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・除染が終わっていないので不安</li> <li>・今だに洗濯干しに神経をつかっている</li> </ul>

## 3. 家計

収入	収入等の減少	10	4	5	4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今後米価が下落するのが心配</li> <li>・農業収入が減っている</li> </ul>
支出	避難・二重生活の費用	1	1	2	7	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自費での引っ越し費用</li> </ul>
	放射能(線)対策費用	4	3	3	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自費で行なった除染費用が補償してもらえなかった</li> </ul>
	外遊びの代わり	6	4	1	9	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保養にかかる費用</li> <li>・中学生の子どもでも大人料金</li> <li>・週末外出費用がかかる</li> </ul>
	他県産の食材・水の購入費用	12	30	13	10	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他県産を取り寄せしているので送料などもかかる</li> <li>・水も買って飲むようになり、他のものも多めに買っている</li> </ul>
	租税、公共料金	3	8	13	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・県市民税等の金額が多くなった</li> <li>・消費税が上がり家計を圧迫している</li> </ul>
	保険	3	1	6	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子供3人のがん保険と家族5人の生命保険の負担が大きい</li> </ul>
	住宅費用	0	2	2	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・需要が多く、土地と家が値上がりした</li> </ul>
	支出合計	29	49	40	40	

#### 4. 子育て(遊び、放射能対応、出産、その他)

		2013年	2014年	2015年	2016年	
遊び	外遊びを させている	29	15	28	33	・空間線量が下がったため安心している ・外でのストレス発散が重要だと感じている ・土遊びを目いっぱいやらせています
	外遊びを制限して (されて)いる	74	39	51	18	理由:公園が除染が終わっていない 近くにホットスポットがある 原発の状況がわからないから 放射線量が高いところがたくさんある 影響:体力、筋力がない 自転車乗り、逆上がり、なわとび等遅れている 肥満が全国水準より多い
	室内遊び場	68	43	9	6	要望:小学生くらいの大きい子どもが遊べる施設がほしい 不満:助成金がなくて放課後クラブがなくなる
	遊び合計	171	97	88	57	
放射能対応	子どもの検査	52	18	28	22	・検査が子どものストレスになっている ・今後何が起こるかかわからないから検査はやり続けてほしい ・検査のために仕事の休みとらなければならないため負担 ・エコー画像を検査結果に添付しないのが疑問
	積算計 (ガラスバッジ)	3	5	3	18	・ガラスバッジの測定値が正しく報告されていない ・毎日記録しないといけないのでめんどうで持たなくなった
	放射能対応合計	55	23	31	40	
出産	妊娠	10	6	1	4	・三人目を妊娠中だが福島で過ごすのは不安
	流産	1	2	3	1	
	出産合計	11	8	4	5	
その他	運動不足 体力低下				4	・学校での外遊びが少なく、体力面で不安
	治安悪化、不安 (除染作業員)				18	・放射能と除染作業員による犯罪からの子どもを守る不安で 二重になった ・除染作業員のガラがわるく、子どもを外に出したくない
	その他				43	・教育環境を充実して、子どもの将来につながることを1つでも したい ・時々、子どもにあたってしまう ・大きな子どもにもケアが必要 ・力不足で何もできないことに申し訳ない気持ちになる ・急激な人口増加で住みにくくなり学校行事もままならない 状況 ・子どもの行動範囲が広くなり地震時の約束事決める事を考 えている ・東日本大震災、福島原発の事を子どもにわかりやす教える 方法を考えている ・ストレスから子どもが落ち着きがなくなり言動が粗暴になり 心配 ・補償をもらっている側の子どもの成長が心配 ・福島に住み続けて子育てをする選択が間違っていないか どうか不安
	その他合計	30	8	24	65	

### 5. 人間関係(考え方のずれ、差別、偏見)

家庭・親族	考え方のズレ	2013年	2014年	2015年	2016年	
		9	9	5	16	・仮設生活をしている親類が自宅に帰ってくれない ・子どもの将来の事や住む場所のことで主人といさかえがふえた
近所	考え方のズレ	16	13	19	31	・外遊びや食品選びの基準など話しにくい ・あまり話題に出さないようにしている ・避難している方とトラブルが増えた ・東電からお金をもらったことに引け目を感じる ・相談すると、神経質になりすぎと思われる ・県外から来た友人と意識のズレあり、残念 ・長期化する中で話す事ができなくなり同じ思いのお母さんと集える場所で共有したい
外部	いじめ、風評被害 結婚出産への 偏見、差別	79	29	72	55	・就職や結婚で差別されないか不安 ・いじめにあう心配 ・福島原発と言われ続けることに違和感を感じる ・福島の間は「モルモット」と言われて心が痛む
避難・賠償 の取り扱い に差異のあ る人の間	取扱いの差異	10	8		46	・避難先に大きな家を建てていたり、新車を買っているのを見ると腹立たしい ・自立の努力をしないで遊びくらしている人を見ると不快 ・職場でも、格差を感じずはられない ・地元が浜通りの人に乗っ取られている気分

### 6. 情報(収集、発信)

情報の収集	情報不信	2013年	2014年	2015年	2016年	
		62	10	46	41	・正しい情報かどうか判断できない ・廃炉作業の進み具合や又地震が起きたときの原発の状況の説明がない ・報道が少なくなってきたので、判断できない
	関心	20	14	153	148	・忘れさらられていくことに不安 ・気にしなくなった(住んでいられないため) ・除染が終わったので事故の重大さが薄れてきている ・原発の再稼働をみると福島が忘れられている気がする ・節電もしていない ・あきらめの気持ち ・地震速報にも慣れてしまった ・放射能汚染が生活の一部になっている ・放射能のニュースが少なくなった ・悪い福島のことはなかった事になっている ・3月を過ぎると、また忘れられている
	情報合計	82	24	199	189	
情報の発信	福島の現状理解	20	14	29	24	・福島の今の現状をもっと知ってもらいたい ・福島の風評被害がなくなる日がくる事を願う ・福島のイメージをよくしてほしい ・他県の人が福島のことをどう思っているか知りたい ・雑誌やネットで色々間違った情報が出る事が多く、心が痛む ・県外の子供達がきちんとした情報を得られるように授業などにカリキュラムをいれてほしい ・やりたい放題にしている避難している方がいることをもっと全国に知ってもらいたい ・福島の様子、原発の現状、子どもの甲状腺ガンの発生等を身近な話題として取り上げて欲しい

## 7. 賠償・補償

		2013年	2014年	2015年	2016年	
賠償	賠償打ち切りへの不満 子供への損害に	46	22	17	21	・子どもの賠償は大きくなるまで続けて欲しい ・子ども手当の上乗せ
	賠償の対象、線引きへの不満	18	58	8	69	・避難している方との保障の差が大きい ・精神的被害にも賠償して欲しい ・震災時の住民票で賠償の差があるのは不公平 ・一部の方だけが医療費が無料なのが不満 ・保障をもらっている子どもが夜遅くまで遊んでいる ・色々な補償をもう終わってほしい
	賠償合計	64	80	25	90	
社会保障	子どもの健康	7	11	14	12	・子どもの甲状腺異常に対する保障がない ・子どもががんになったら保障して欲しい ・10年、20年後も保障がきちんともらえるような制度ができてほしい ・健康診断、甲状腺検査は無償でおこなってほしい ・県内の子ども(18才ぐらい)までは、補償金を出してほしい
	家計負担	4	12	21	7	・主人が病気で検査代、薬代がかかる ・児童手当等の給付を減額又は廃止されてしまうのが不満
	社会保障合計	11	23	35	19	
租税		12	8	5	2	・消費税が上がるのも補償が原因 ・国の増税にあたっての軽減策を考えるよりも復興につけてないことが理解できない
対応全般	行政	19	21	49	58	・避難区域の方たちとの保障差の不満 ・国家予算をもっと復興にまわして欲しい ・議員ばかり豊かな生活をしている ・無駄なところばかり税金で整備している ・精神的な賠償をしてほしい ・データを収集しているだけで何も動いていない ・県の税金を除染作業員の生活保護助成に使うより、子どもの運動不足からくる肥満対策に少しでもまわしてほしい ・ゆとりある助成金補助をおねがいしたい
	東電	6	7	24	25	・避難区域の方たちとの保障差の不満 ・精神的な賠償もしてほしい ・除染が期限を10日過ぎていただけで補償してもらえなかった
	原発の是非	8	10	12	21	・生活の役にたっているが、やめるべき ・原子力にたよっている生活が悲しい ・処分できない核のゴミをつくるのをやめないことにいきどおりを感じる ・再稼働したい方は、福島に来て生活してる人の話を聞いてほしい ・再稼働してほしくない ・放射能を中和する技術や機械を発明してほしい
	寄付、義援金の使途	1	1	1	10	・全て復興にあててほしい ・支援金の使途が気になる ・使い道、使った内容を掲示して欲しい
	対応全般合計	34	39	86	114	

8. 健康						
現在	子ども	2013年	2014年	2015年	2016年	
		57	23	188	35	<ul style="list-style-type: none"> <li>・よく鼻血をだすが事故の影響なのか分からない</li> <li>・子どもが地震速報、救急車、パトカーのサイレンに敏感に反応する</li> <li>・検査結果がのうほうありになって心配</li> <li>・B判定、C判定の子どもがだんだん増えているし、甲状腺がんと診断された子が多すぎると思う</li> <li>・今は元気に学校に通っています</li> </ul>
	親	22	13	35	20	<ul style="list-style-type: none"> <li>・原発事故の影響のストレスで病気になった</li> <li>・震災の話をすると息苦しく、辛い状態になる</li> <li>・福島に行くと咳、腹痛、嘔吐がある</li> <li>・夜、1人で泣くこともある</li> </ul>
	現在合計	79	36	223	55	
将来	子ども				117	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの将来の心と体に原発事故の影響がないか心配(原発から離れていても、除染もすんでいても)</li> <li>・医療を充実させて欲しい</li> </ul>
	親				14	<ul style="list-style-type: none"> <li>・健康面生活面の心配がどうやったらぬぐいとれるか分からない</li> </ul>
	甲状腺				29	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの甲状腺ガンが増えたという情報があるのに放射線との因果関係が分からないので不安</li> <li>・甲状腺検査の結果があいまい</li> </ul>
	将来合計				160	

9. 生活の状態						
生活の状態						
肯定的 (生活が戻っている)					67	<ul style="list-style-type: none"> <li>・おだやかに生活できている</li> <li>・今は家族全員で暮らしていけるので、とても幸せ</li> <li>・前を向いて生きていくことが一番</li> <li>・不安を子ども達には気付かれないように楽しく明るく生活していきたい</li> <li>・放射線量等、特に意識せずに過ごしている</li> <li>・1年目の予想よりは普通に暮らしをしている</li> <li>・震災前と同じ生活ができている</li> </ul>
否定的 (生活が戻っていない、不安)					20	<ul style="list-style-type: none"> <li>・忘れて将来を楽観視できる毎日がおくりたい</li> <li>・原発事故がおきて人生がかわってしまった</li> <li>・ただ過ぎていっている感じがする</li> <li>・今だに何かを心配しながらの生活</li> <li>・前向きになりたいのに、なんかなれないです</li> <li>・事故前より異常な放射線量なのに普通に生活していて大丈夫なのか不安</li> <li>・何も良くなっているように思えない</li> </ul>

10. その他						
その他(借り上げ補助打ち切りに対する絶望)						
					3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・借り上げも終了が決まり、絶望</li> <li>・借り上げ住宅の補助の延長希望</li> </ul>



## 11 おわりに

今回の調査結果は、以下のようにまとめられます。

- お子さんの外遊び時間は徐々に増えていますが、全国と比べると短いことがわかりました。テレビ・インターネット接触時間は、全国と比べて長いようです。この影響を注視していく必要があります。
- 親御さんがお子さんと一緒に過ごす機会は、全国と比べると長いことがわかりました。
- お子さんの適応と精神的健康については、全国と比べ支援の必要性が低いことがわかりました。ただ、男の子については昨年よりも支援の必要性がやや高まっています。
- お子さんの健康状態は良好ですが、「皮膚のかゆみ」「疲れやすい」が全国と比べて多いようです。
- お母さんの健康状態も良好ですが、「皮膚のかゆみ」「肩こり」「腰痛」が全国と比べて多いようです。
- お母さんの心の状態は、全国と比べても安定しています。ただ、「イライラ・怒りっぽい」「疲れやすい」といった症状が多い点は、震災・原発事故の影響が残っている可能性もあります。
- 震災・原発事故の影響は日常生活にも残っています。いまだに4割の方が地域の放射能汚染は深刻だと考えています。半数以上の方が保養に出かけることがあるようです。
- 「補償の不公平感」「放射能情報に関する不安感」は高いままです。「健康への影響」や「差別」などへの不安感も半数程度の方が感じています。少なくとも地産食材や洗濯物外干しへの抵抗感、周囲の人との認識の違いなどに悩む方もいらっしゃいます。
- 3人に1人は事故・放射能を話題にしにくいと感じ、8割以上の方が事故の風化を感じています。
- 2回目の甲状腺検査では(A2)判定が増加しており、その動向を引き続き注視する必要があります。
- 事故後の取り組みについての国および東電に対する評価は、低いままにとどまっています。
- 地域への愛着や住み続けたいという意識については、全国と比べても居住地域に肯定的な傾向がみられます。一方、転居意思のある方も多く、複雑な思いがあることがうかがえます。
- 生活において助けになってくれる人は全国と比べても多いことがわかりました。夫(お父さん)、親ともにお母さんをよくサポートしているようです。
- 同年齢のお子さんを持つ他地域の母親の調査からは、半数以上が放射能の影響に不安があり、福島産の食材、福島への訪問に抵抗があるということがわかりました。原発事故の補償については、自主避難者、避難区域外の居住者のいずれに対しても補償すべきだという意見が圧倒的多数でした。

お子さんとお母さんの健康状態はおおむね良好で、お母さんの心の状態も安定してきています。しかし、原発事故が長期的にみて生活や健康にさまざまな影響を与えるのではないかと不安は解消されたとはいえません。お一人お一人が抱えている問題や地域の課題などいまなお残っており、補償の問題や行政の対応の不足など、さまざまな課題があります。

福島子ども健康プロジェクトは、引き続き調査を継続するとともに、問題の解決に向けた取り組みを進めてまいります。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

福島子ども健康プロジェクト

